
coghweel

屍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

c o g h w e e l

【Nコード】

N 4 6 6 7 C

【作者名】

屍

【あらすじ】

高校への切符はあの世界への切符だった

序章（前書き）

初投稿です

誤字脱字は目を瞑ってください

修正完了版です、ごゆっくりどうぞ

序章

｝ cogwheel ｝

中学三年生、季節は冬、クラスメイトや先生が受験シーズンとして最も忙しく活動するシーズンだ。

そんな中でも俺は高校受験というものがまだ実感できず、周りの忙しさをよそに志望校も決めずぐうたらしている。

そんな毎日の中、普通日課がなく、テストを一時間受けてそのまま下校する、そんな一日があった。

内容は『どんな就職先に行きたいか』『将来結婚はしたいか』など下らない内容だった。

先生から進路の決まっていないう俺を含む数人への牽制だと思い、俺はそのテストを『白紙』のまま提出した。

だが、そんな抵抗もむなしく最終的な志望校を決めて用紙にまとめ、職員室に出しに行かなければならなくなった。

俺もこればかりは仕方ないと近所にある不評が耐えない高校を用紙に記入し、俺は職員室へと向かった。

「鬼山^{きやま}か、もう両親から話は聞いたか？」

顔を見せると先生は深刻そうな面持ちで告げた。

「親？なんのことですか？」

先生は聞いていないのか、と机においてあった書類を取り出し、俺にその書類を読んで聞かせた。

「推薦状、鬼山きやま 龍爾殿りゅうじ」

先生はその部分だけ俺に読み聞かせると後は自分でと言い、俺に書類を渡してきた。

「先生はな、この推薦状は丁度良いと思ってる、どうせその志望校調査用紙も近所の不良高なんだろう？」

図星の俺は取り合えず親と話します、と職員室を後にした。

俺は午後の授業をすっばかしくさま帰宅、母親を家の和室に呼びつけ座らした。

「推薦状の事、聞いてきたの？」

申し訳なさそうに切り出す母親に理由を聞く。

「龍ちゃん、進学に対してあまり熱心じゃないみたいだったから、見た？中身、学校があるのは幾つか山を越えた先なの、その気になるまで黙っておこうと思って」

少し、申し訳なかった。

俺は他人様から見てお世辞にも成績が良いとは言えず、親になんとも迷惑をかけてきた俺の事をこんなにも心配してくれている親に頭

があがらなかった。

「俺、やってみるよ」

まだ雪も降りはじめないこの時期、俺はあの世界の扉に手をかけた

一夜（前書き）

続きです、こんな駄作を読んただきありがとうございます
最終修正終わりました

一夜

｝ c o g w h e e l ｝

バスを何回か乗り継いぎ、俺はこの地にやってきた。

バスを降りてすぐの所にあつた配布地図を手に取り自分の住居を確認する。

事前に資料として届いていた地図はとても簡単にしあがっており、この町を円形に例え5つに区切りマスコットキャラが解説している仕様だ。

区分内容は以下の通り。

まず北西に今俺がいる都市区。

そして川に囲まれるようにある南西の農業区。

川を挟んだ反対側、南東住宅区。

北東に一つポツリと建っている学校を取り囲むように林の茂った学業区。

最後に都市区から住宅区へ楕円形に伸びる開発区である。

俺の家は真東、住宅区と学業区に挟まれるように林の中に建っているらしい。

適当につかまえたタクシーに乗り込み、運転手に場所を教えると。

「お客さん、この家ってまさか」

と、顔をまじまじと見られた、大体予想はしていた。

物件を選んだのはあの母さんだ、あの人の性格だとスーパーでトマトを買うように同じ値段ならいくら見比べお得な方を買う精神で物件を選んだに違いない。

「なんか、出るんですか」

おそろおそろ聞いてみる。

「いやあね、私その物件にお客さん連れてくのあなた入れて二回目なんですよ」

運転手さんの話に相槌を打ちながら話の先を聞く。

「前のお客さんね、送り届けた次の日にもう一度乗せた時に『実家に帰るんだ』って出て行っちゃったんですよ」

なんだかとっても悲しくなってきた。

「その家、林の中にあるでしょう？昔、大量殺人事件、あったらしいですよ」

運転手さんは笑いながら続けるが、その情報は知らない、いらなかった。

「他にも自殺の場所に使われたりとか、コック さんに使われた場所だとか」

乗り物酔い体質だが、なんか色々なものに酔ってしまい途中でタクシーを降りて歩いて行くことにした。

歩いて20分、その家についてみるとそんな話の面影も見せない普通の家だった。

開錠して中に入ると詰まれたダンボールと設置された家具が目に入ってくる。

家の中で引越し屋さんが死んでたらどうしよう、なんて想像はスグに解消され、俺はダンボールの目を通す事にした。

まだ使わないもの、今日当たりから使うもの、作業は順調に進んでいく。

終わった頃には日も暮れようとしており、夕飯時の丁度良い時間になっていた。

タクシーで来る途中、住宅区の中に一つだけスーパーをみつけておいたのでそこに足を運ぶこととした。

出発前に幾つか母さんに料理を教えてもらっていたがやはり時間も無い、仕方ないのでカップ麺を幾つか選んでレジにならんだ。

待っている最中に前に並んでいる女が俺が通う学校の制服を着ている事に気がついた。

紺一色のスカートにワイシャツの上に赤いブレザー。

どうりで女子生徒から不評なワケだこれじゃそこらのオッサンも仕留められそうに無い。

「はい、わかってます、すぐ戻りますから」

気づくと女は精算をしながら器用に携帯で通話をしている、携帯からぶら下がっているストラップは十字架に貼り付けられたキリストさん、現代の女子高生ならまず選ばないだろう、信者だろうか。

まあここまでジックリ見ているのにも事情がある、かなりの美人さんだった。

美人さんは精算が終わると同時に通話を止め、せつせと袋詰めしたかと思うと駆け足で出て行った。

…少し真似してみたが結果は惨敗、買い物の手伝いなどしたことがなかった俺は袋詰めもまともに行えず、拳句袋を破る失態までしてしまった。

無念…

家に帰ればもう日も完全に暮れ、夕飯時も軽く過ぎていた。

カップ麺を腹に詰め込むと出かける前に沸かしておいた風呂に入り、そのまま床についた。

会話のない夕飯、順番待ちのない風呂、どちらも俺の不安を大きく膨らませる

不安が最高潮になる前に寝ようと思う。

〔another part〕

住宅区の端にあるスーパーからずっと駆け足で開発区までやってきた、もう20分ぐらい走っているだろうか。

だが足を止められない、携帯で時間を確認する、電話を切ってから20分は経っている訳だから遅いぐらいだ。、ポケットに携帯をしまおうとするとリストのストラップが引っかかる、だが気にせず走る。

しかも電話を切る時には『スグ戻る』なんて言っちゃったし、怒ってるだろうなあ。

その内に開発区の中心に聳え立つ時計台にたどりつく。

「だから住居はもっと普通にしましょうってあれほど」

少し泣き言をもらす。

深呼吸してから時計台を上り始める。

本気を出せばもっと速く走れるが、これ以上のスピードで走れば間違いない本日も一人様1パック（中略）円タマゴが潰れてしまうだろう。

時計台の頂上に着く頃には45分は過ぎていた。

「ただ、いま、はあ、もどり、ました」

息も整えずに玄関を開けるとそれと同タイミングで紙飛行機が額に当たった。

『グズ』

紙飛行機には油性マジックででかかところ書かれていた。

「それでも結構急いだんですよ」

言い訳をしておく。

「努力に見合わない結果でご苦労様」

嫌味第一号である、今日はまだ嫌味を言われてなかったのに。

「んで、飯にすんの？それとも速報聞いとく？」

速報のほうで、と言うとまた紙飛行機が飛んできた。

『俺は腹減ってんだけどね』

嫌味第二号である。

じゃあやはり夕飯を、と言いかけると彼は勝手に速報を告げ始めた。

「本日どっかのだれかが買い物してる頃、『7つの大罪』の同時処
刑任務の実行、それに成功した」

『何故ここで待機していなかった』なんて副音声に耳が痛い。

「取り合えず御飯にしませんか？お腹減ってるでしょ？」

苦し紛れに回避行動を入れてみる、と嫌味は終わり彼はただ、そうしよう、とだけ返答した。

「お腹、そんなに減ってました？」

ああ、とそれだけ言って彼は紙飛行機作りに戻ってしまった。

たまに見せる子供みたいな振る舞いに笑顔を浮かべながら、私は今晚の食材に手をかけた

一夜（後書き）

次からが本編になるかなあゝ

二夜（前書き）

続きです、

二夜

}\ c o g h w e e l }

早朝6時、脳も体もハッキリと目を覚ましはじめた。

昨日買いだめたカップラーメンにお湯を注ぎ、洗面台で顔を洗う。
前にここに住んでいた人物とは違い、後二日ぐらいならこの家に居座れそうだ…

鏡に映る自分を何秒か睨んだ後ふと思い出す、今かやく入れずにお湯入れなかったか？

しぶしぶ具無しカップラーメンを食べて制服に着替える。

男子の制服は学ランだ、昨日見た女子みたいにブレザーにならよかつたのにと呟く。

俺は少し冷える朝をガマンし、他の新入生になめられないように前のボタンを全開にすることにあする…逆に調子に乗ってると思われるかな？

とにかく一番乗りしようとかかなり早く家を出た。

真東にある俺の家から東北の学校に行くのに北に向かって突っ切ることができない、学校は町の中央の開発区から伸びる一本道を通らないと着けないようになっていいるらしい。

らしいってのはそうゆう通知が今日のポストに入っており、けしてその道以外はつかっちゃならないと警告の用紙を見せられたからだ。住宅区から開発区まで来た、開発区では大きなビルが建てられていたり、その場所にあった民家を取り壊したりとこんな朝から大きな機械が動いている。

「しょーねん」

聞こえた声に周りを見渡すと一人の男がドラム缶に暖をとっている。俺？と指を顔にあてるジェスチャーをする。

「そそ、君、まだ学校早いだろ？あつたまつたらどうだい？」

確かにとても早い時間に出てきた、だがその男を見るとどうにも怪しい。

男は20歳ぐらいで歳のわりにヒョロツとした体でその体を隠すように一枚のボロ布を羽織っており、ズボンは一見一般的に見ればもう捨ててしまぐらいのボロボロのジーンズ、頭は何十年も散髪していないようなボサボサ髪でその隙間から色白の顔が覗いている。

「あ、怪しいよねえ、チミが警戒すんのも頷く頷く」

だが、その透き通った声がどうにも不審者に見えず、暖にあたった。

「暖かいだろ？ここら辺は木材に困らなくてねえ」

男はケケケと笑い、取り壊された家の木材をドラム缶に入れていく。

「なあ学生、君は罪ってどんなもんだと思う？」

しばらくうつむいていた男はいきなり俺にこんな質問をぶつけてくる。

「償うもの、背負うもの、罰せられるもの、どれが適任なのかな？」

男の声はどこか遠くに向かって放たれている印象を覚える。

「罪って形を言語に表現しようとしても難しいと思います、とりあえず俺は生きるのが仕事ですから、罪の形も生き続けるって感覚があります」

また男はケケケと笑う。

「そっか、手ぶら君はそんなカンジか」

何故俺はこんな風に自然に答えているのか…歳かな？

少し沈黙が続くと男がボロボロのジージパンのポケットからビー玉を取り出し手渡してきた。

「ゆるじよゝな、ボタン全開君と俺との、そろそろ時間じゃないのかい？」

俺はお礼を言つてその場を離れる、なんであんな不思議なやつと話をして、なんで渡されたビー玉を拒否しなかったかはよくわからない。

振り向けば男の姿はなく、近くの廃ビルからケケケと笑い声が聞こえてくる。

ただ言える事、それは最後の最後まで俺の呼び方を統一しなかった男に俺の名前を教えるのを忘れたことだった。

開発区から学校への一本道はスグに見つかった、その道からは最近作られた新しい道のような感覚を受ける。

その道をしばらく歩くと校門がひっそりと佇んでいた、国立紅咲高等学校こくりつあかさきこうとうがっこう、地図に書いてあった林は校門と学校の間に広がっているものようだ、小さな林の向こうに学校が見える。

緊張しなくても中学と同じだ、他人とはある程度の距離を置き、人との接触は最低限におさえる、そうすれば特に大きなトラブルにもかかわらずに済むはずだ。

自分に十分言い聞かせて校門をくぐる。

すると目の前にあった並木道は無く、代わりに大木が多く茂るジャングルになっていた。

冷静に分析している自分。

「疲れてる、疲れてる」

目を瞑りながら二回繰り返す。

ゆっくりと目を開く。

ジャングル、ジャングル！！

「夢、夢」

もう一度目を閉じ考える、俺が見えた学校は偽者？そうだ、そうに
違いない寝ぼけて学校を見てしまったに違いない。

たぶん地図に書いてあったやさしい林は実はジャングルで、ココを
抜ければ学校にたどり着ける、久々に冴えてるなあ俺。

と、目の前にあるジャングルを一通り正当化して歩き出す。

だが流石に茂りすぎのジャングルは都会っ子の俺にはとてもつらく、
30分歩くと疲れきってしまい近くの倒木にこしかけていた。

「もう少し早く家を出ないと明日あたりからは間に合わないな」

明日の時間の予定を携帯にメモしておく、先が見えないジャングル
を見ていても仕方ない、そろそろ出発しようと準備をすると前方に
あった大木の影から物音と共に人が現れた。

だがちよつと右肩からのパーツがなく、ちよつと目が血走っていて、
ちよつと来ている服が軍服っぽくて、ちよつと手に持っている凶器
っぽい日本刀が返り血ボタボタなのが気になります。

「紅咲高への行きかたを教えろ」

男はそう言つと疲れ切つて刀を持つ力ももうなさそうな左腕を上げ
る。

男は一定距離をとりながらも凶器の日本刀をこっちに構え、まるでここからでも十分俺の首を取りにいけるんだぞ、と言っている感じだった。

「ああ、えつとお自分、新入生で」

発言の一言一言が危険を察知して上手く発音できない。

「じゃあ、タダの置物に等しいな」

男はもう耐え切れないといった感じで地面に日本刀を地面に突き刺す、拳を強く握るとさっきまで凶器をもっていた左手が炎に包まれ赤く燃えていく。

「セフィロトの場所でも知ってたら逃がしてやったのによ」

どこかの喫茶店の名前？いやそんな事いつてられない、腕が燃えているのに熱そうにしない所やら目が据わっていて意味不明な単語を放つ所からして非常に怪しい。

逃げよう、だが立ち上がって走ろうにもビビッて足腰が動かない。

さっさと終わらせようと男が駆け寄りながら俺に向かって燃えた左手を振り下ろす。

男の左手を覆う炎はとても熱く、その熱さに反応した体がなんとか初撃を回避してくれた。

そのまま横に転がる

チツ、と男が舌打ちする

今の行動でも十分理解できる、男の左手は俺を喜ばせる手品じゃない、俺と男の間は3メートルはあった、だが男はソレを一步で詰めてきた、つまり訓練を受けている、最後に、俺が攻撃をかわした時にした舌打ち是一般人の俺に対して手を抜いた事により「エモノ」が逃げた事に対しての苛立ち。

結果、相手はまだ本気じゃない、俺は狩られるしかないタダの豚、以上。

「次は避けるな」

男は顔をしかめ、俺にむかって歩いてくる。

「ちょ、おかしいって、俺なんもしてない」

そんなことは関係ないらしい、男はズカズカと歩みを速めていく。

聞く耳なしですか、俺は近くにあった男が地面に突き刺した日本刀をなんとか持ち上げ相手に向かって構える。

「使えるのか？やめとけ」

歩みを止め、見下すように言う、この男は俺が刀を使えない事を確信している。

俺も剣道ぐらいはやったことはある、だがこの手にあるのは日本刀、剣道と剣術では喧嘩殺法に中国四千年の秘伝格闘技ぐらいの差は出てくるだろう。

だが相手の実力がわかれば俺はそれなりの行動をするだけだ、そうタダのガキと思わせなければ少しは逃げる隙も生まれる。

相手もまだ油断してくれてる、今ならまだ逃げるチャンスを無数に作り出せる。

俺は持っている刀を男に向かって全力で投げる、刀は男の目の前に上手く突き刺さってくれた。

「刀、構えろよ」

とりあえず、あの炎はよくわからない、あの軍服の装備の一つなのかもしれないが俺の知っている範囲じゃない物に対抗するのは利口とは言えない、いくら剣術であろうとも相手は片手 大きな隙を生み出すにはもってこいだ。

「悪いな、せっかくのお誘いだ、さっき右手落としてきちまってるね」

こんなもん、と男は刀を茂みに蹴っ飛ばすと先ほどから火力を上げ続けている左手で地面を殴る。

男の左手の炎は地面をつたい、男と俺を囲むように半径10メートルぐらいの炎の囲いを作った。

「紅咲町の力は『物』だからな、武器で戦うのは自殺行為だ、だろ？」

そうはいかねえぞ、と拳のみに炎を戻して男は構えた。

物の力？武器での戦闘は自殺行為？

この男はここにきて俺に最大のチャンスを与えてくれた。

「武器持ってたほうが、まだマシな死に方だったろうね」

俺の発言に男はたじろぐ、この男は俺にも自分みたいな世界仰天手品ができると思っている、確かにあの炎は俺にとっても脅威かもしれない、だが相手にとって俺の『見えない力』はもつと脅威のハズだ。

物の力、その本性は俺には理解しがたいものかもしれない、だが相手の前でちらつかせるハツタリなら俺にも出来るさ。

相手の爪の甘さによってだんだんいつもの調子が戻ってきた。

相手との視線を逸らさないようにゆっくりポケットの中を漁る。

そして唯一ポケットの中に入っていたコイツを相手に見せ付ける。

「ビー、玉」

男が呟く。

残念ながら今日は手ぶらだ、まあ財布はあるが小銭やお札を出してもたじろいではくれないだろう。

だがビー玉なら細かい使用方法はわからない、相手は深読みに深読みを重ねて手は出せないはず。

男は拳の炎をまただんだんと高め始める。

「世界中から7人を選び、その一人一人に一つづつ『大罪』を背負わせる」

男は拳をまた強く握り締めた。

「確かに『7つの大罪』は強い、だがその個別の『大罪』は貧弱なことぐらい、お前が良く知っているだろう？『大罪者』」

男の口元が上がる。

「その『ビー玉』は昔は一塊だった『1つの大罪者』、だが神はソレを認めず、分けた…そんな感じのガラス玉に封じ込めた、確かそうだったよな？」

ハッタリを見破ったワケじゃない、だが俺のハッタリは相手が良く知っている力に似ているようだ、そしてソレはとてつもなく弱く、この男だけでも十分ねじ伏せられる力。

「腕はなくしちまったが代わりに良いもんが手に入りそうだ」

声が高ぶり興奮しているのがわかる。

男の左腕は最初の時のように燃えており次に狙う羊を確実に刈り取る体制に入った。

距離をとろうにも背後は炎の壁が弱まることなく燃え続けている。

男がゆっくりと俺に手をかざすと腕まで広がっていた炎が男の手のひらの一点に集中し、野球のボールぐらいの大きさにまとまった。

そして男が左腕に力を込める、その行動に気づいた時にはすでに遅かった、男の手から放たれる炎の玉、その玉は目に追えるスピードを少し超え一瞬で俺の鼻の先に現れ、耐え切れなくなったかのように爆発した。

体中が高熱によってとろけるように消えていくのがわかる、後ろに吹き飛ばされすぐ後ろにあった炎の壁により挟まれるように焼かれていく。

「コンガリ逝っちまえ」

炎が消えたときにはまだ辛うじて意識があった。

男はこっちに近づいて俺の持っているビー玉を手から剥がそうとする。

それを見ている内に、俺の意識は遠ざかっていった。

｝ another part ｝

ガキは一撃で焼けてしまった、とりあえず能力を出されないうちに倒すことができてよかったと胸をなでおろす。

「くっそ、焼きついてやがる」

少し力を入れすぎたかガキの手はビー玉を握り締めたまま指と手の

ひらが焼け付いていた。

「まあ腕ごともってけばいいだろ」

少し疲れた、その場に座り込んでタバコをくわえる、腕を切り落とされたり今日は散々だったがああ、のビー玉さえ持ち帰ればどうとでもなる。

片手でマッチを取り出し、器用にタバコに火をつける。

人が焼ける臭いが酷い、すぐ隣にあるソレをもう一度確認する。

だがその場に倒れていた焼死体は無くなっており、代わりに無傷のガキが起き上がった。焼けた服をまじまじと見ていた、ガキの口が開く。

「主人の気絶を確認、『7つの大罪』オールナンバーを展開」

まだ状況が飲み込めない俺の隣でガキはブツブツと何か言っている。

「近くに敵性反応を確認、削除します」

ガキの目がギョロリと俺を捉える。

タバコをその場に捨てて俺はもてる力で一瞬で5メートルぐらいの距離をガキとの間にとった。

そして敵を睨む、ガキは追ってきていない。

が、ガキはまるで異次元空間をもっているかのようにドコからかト

ゲ付きの鎖鉄球を取りだし、慣れた手つきで俺に放った。

「敵の戦線離脱を確認、それを攻撃、攻撃は命中、相手の左腕を破壊」

ガキの言ったとおり鉄球は簡単に俺の左肩をもって行った、肩に激痛がはしる。

「武器の回収の際に敵の頭部を誘拐」

その言葉に反応してすぐさま振り返る、そして左手を撥ねた武器を確認すると、既に武器は俺の首を体からちぎり切っていた。

「目標の行動不能を確認、この空間から離脱します」

〈main part〉

目を開くとそこは学校に続く林の途中だった。

「君、大丈夫？」

高校の教師らしき男が駆け寄ってくる。

「俺は…」

「いやなんか動かなかったから大丈夫かな？って」

気づけば俺は林の真ん中に突っ立っている。

「大丈夫です、式はもう終わってしまいました？」

「いや、君が一番乗りだよ、それより保健室にいったほうがよくないかい？」

大丈夫です、と断った後、受付の場所を問う、そうだ、俺は今日は早く出てきたんだ、式に間に合わない筈がない。

「受付は玄関だから、行けばわかるよ」

先生に教えてもらったとおり受付を済まし、今日一日かけて行われた式と講習をボーっと過ごした。

何かを忘れている、俺はなんであんな場所で突っ立ってたんだっけ？その事でどうも身が入らない。

帰宅する途中もそのことが頭から離れない。

「ま、思い出せないし、仕方ないよな」

またいつか思い出さず、と朝の教訓を生かしてかやくを入れ忘れない事に集中する。

｝ another part ｝

「ただいま戻りました」

時計塔を登りきった先にある我が家に帰ってきた。

「すみません、バイト長引いちゃって」

今日は紙飛行機は飛んでこない、彼は窓から住居区を見下ろしている。

「何を見ていらつしやるんですか？」

彼は何も言わずに窓の外を指差した。

「あ、町中真つ赤ですね、キレイです」

私の言葉に彼はため息をついて話し始める。

「全ての目覚めだ」

彼は不適に笑う。

よく見れば、細かい所は確認できないが赤く光っているのは公園の花壇だったり家の庭だったりする。

「ある一定の周期、またはある条件が満たされるとこの現象は起きる」

「すごいですね」と返しながらふと思い、彼に聞いてみる。

「その条件、あなたはご存知なんですか？」

ピキッ、

今のはわかった私は地雷を踏んだようだ。

「昨日の作戦、『7つの大罪』の抹殺は7人同時に殺しても意味が

無いとゆう結果だ、本部に伝えて、その使えない頭を回復させるために寝ろ」

御飯は？と聞くと無言で自分の部屋に戻っていつてしまった。

嫌味はなかったがその代わりに怒らせてしまったようだ。

反省した後、御飯の支度をして彼の分を彼の部屋の前に置いておき、自分も寝ることにした

二夜（後書き）

次回はちゃんと違うキャラ出ます・・・

三夜（前書き）

やっと本編って感じですが
最終更新終了（たぶんね

三夜

cogwheel

深い、深い森の中、小さな焼け野原が見えた。

その中心に一つ、何かに取り残されるように倒れている人がいる。

いや、ソレを人と言うのはもう無理かもしれない、だって ソレは
頭も腕も無い ただの…

先を見る恐怖心で目が覚める。

人が死んでる夢なんて、そろそろこの家の特殊能力の発動か？時間
はまだ朝の5時、まだ太陽も昇っていないそんな朝。

「おはよー」

昨日とはまた違う朝、今日は普通に間に合うように学校を出たから
だ、生徒のほとんどは住宅区から登校するので多くの生徒がこの道
を使い、賑わいをみせている。

昨日のうちに多くの友達ができたやつもいるだろう、俺も作れば良
いのには昨日は一体何をしていたんだか。

「鬼山あ」

肩を叩かれる、後ろを振り返ると同じ学校の生徒だった。

「鬼山一人？じゃあ俺も一緒に行って良いか？」

誰？と聞くと生徒はポケットから緑色の縁の校章バッジを見せてきた、学年ごと違う色だが、今年の新入生は緑である。

「同じクラスの宇白^{うしろ かずま} 和真、出席番号3番、お前の隣の席」

9番だろ？と聞き返してくる、一列6人で並んでいるのなら俺の席の隣は確かにこいつだ。

「自己紹介は結構アピールしたんだけどねえ」

昨日は自己紹介までしたらしい、肩を落としている宇白を見る、身長はややあつちが上、髪の毛は天然パーマでくるくるしているし整っていない、体格は普通の学生、いたって健康そうだ。

「鬼山初日からぼけっつとしてたもんな、先生睨んでたぞ」

そんなことまでしてたのか、だが昨日は朝方家を出た辺りから記憶が薄れている、思い出そうにも思い出せない。

「お前も俺を見ていたなら先生が睨んでたのは俺とお前かもな」

あ、と宇白は渋い顔をする。

「てか鬼山、夢見た？」

「俺も人間だからな、夢ぐらい見るさ」

皮肉いっぱい返す。

「そうじゃねえって、力の夢だよ」

「悪いな」

「本当に見てないのか？」

くどい、と頷く。

「昨日な、変な夢みたんだよ俺が変なチカラに目覚めて敵を倒す夢」

「お前と同じ夢を何故見なければならん」

考えただけで気持ち悪い。

「それが内容やその能力に違いはでも、力の目覚めるって夢はほとんどのやつが見てるらしい、さっきここまで来るの生徒もその話ばっかだったし」

生徒って言っても新入生だけだけど、と付け加えてくる、なるほどね その条件なら俺が見てもおかしくないって事だ、だが昨日見た夢は…どんな内容だったわけ？

「入学早々乗り遅れたなあ、もしネタに困ったら今の話使って良いぜ」

好意はありがたく受け取っておくことにする、そんな話をしているうちに校門までたどり着いた。

昨日と同じで校門と学校の間には『

』がある。

ん？なにか引つかかる、こんなちんけな『林』じゃないはず、
『だっただはずだ。』

全く思い出せない昨日の事を思い出していく。

そしてその記憶の断片を見つけ、足を止めようとした時には。

『林』は『ジャングル』に変わっていた。

「なんだよ、コレ」

隣にいる宇白は自分の目を疑うかのように何度も目をこする。

「昨日はこんなじゃなかったのに」

宇白がそう呟いた瞬間、森の奥から学校のベルがかすか聞こえてきた。

背後から騒がしい声が聞こえる、どうやら他の生徒達も迷い込みこの状況が掴めていないようだ。

ここにいたらパニックに巻き込まれる、俺は宇白の手を強引に引っ張り木々の奥へと入っていく。

「宇白、少し落ち着いて聞いてくれ、この状況は確かに普通じゃない、だが普通の物が一つだけあった、なんだかわかるか？」

引っ張りながら声を強くして訊ねる、宇白はこの状況をなんとか整理しようと数秒考えた後。

「学校の鐘」

かすかに聞こえたあの音を宇白はちゃんと聞いていた。

「ココから出るぞ」

鐘の音が聞こえてきたほうに歩き出すと宇白も俺に歩幅をあわせ付いてくる。

「冷静なんだな、こんな状況で」

さっきよりも落ち着いて宇白が聞いてくる。

「昔から恐怖感とか緊張感とか無いんだ俺、もし学校に武器を持った殺人常習犯が襲ってきても俺だけは確実に生き残って見せるよ」

そう、産まれた時からこんな事には感心がない、ココから出られなかったらなんて事は頭の片隅にも思い浮かばない、状況を見定めて行動に移せば俺にできないことなんて限りなくない。

数分歩いと倒木があった、宇白の体力も心配だ、ココで休むことにした。

「コゲ臭い」

休憩中に宇白が言う、確かにコゲ臭い、しかもスグ近くだ、臭いの方向に歩とその場所だけ木々が燃やされている、しかも数分前のことのようにその一帯はまだ熱を帯びている。

この状況、知っている、当たり前か、だって昨日俺はココで『
を』したんだから。

「なんだよ、コレ」

希望をそぎ落とされたそうな声が聞こえた、宇白は目の前にあるソ
レは、頭部と両腕が無く、その場に膝を折るように倒れている。

宇白の手をまた引っ張りその場から離れた後、宇白の体を樹に押し
付けるようにして宇白の両目に焦点を合わせる。

「休憩を続けてろ、見てくる、絶対にココを動くな、そして忘れろ」
宇白を倒木に座らせてさっきの場所に戻る。

死体がまだ固まっていなくて死んでから時間はあまり
経っていない、この円のように取り囲んだ焼け跡、ココ周辺が燃え
るのとはほぼ同タイミングぐらいで亡くなったのだろう。

そして重要なことは、俺はこの事件を知っている、全てを思い出し
た。

俺はコイツに殺されかけた、いや殺されたはずだ、じゃあ何故あの
時の火傷がない、この状況はおかしい。

「人？」

ものすごいスピードで振り替える。

「ソレ、あなたが殺^ヤつたの？」

同じ学校の女子だった、違う、と言おうとすると女子は知っているかのように頷く。

「あなたであってあなたじゃない者」

いや知っているかのようにではなくこいつは知っている、俺が意識を失った後の事を。

「戻りましょう、彼をあまり長く放置するのは良くないから」

女子はズカズカと宇白が居る方向に向かって歩き出す。

死体を一瞥してから女子の後を追う、一足先に着いていた女子にビツクリしたのか宇白は丸くなってしまっている。

「今回は戦力になりそうにもないわね」

宇白を倒木から蹴り落として、座って、と倒木を手でぺちぺちと叩く。

「これから現状を報告するわ、あなたの意見を聞かせて」

ようやく落ち着いた俺にまた新しい重荷がやってくる。

女子は俺より一回りぐらい小さく、髪の毛は透き通るように白くそして腰あたりまで長い、その髪にはウェーブがかかっている、顔のぞいてみるとかなりかわいかった、日本人ではこんな産まれはないだろう、そして更に驚かしてくれることに目は金色だ。

「聞いていた？」

少しトゲのある声が俺を突き刺す。

「でしょうね、口が馬鹿みたいに開いてたから、もう一度説明するから今度は聞いていて、まずこのジャングルのことから、このジャングルは実在している、以上」

いやいやいやいや、一番よく分からない所を快速でつつきる彼女を止めた。

「説明が足りない？しょうがない人」

ちよい頭に來たぞ。

「現状を知っているなら詳しく教えてくれ、漫才してる暇がない」

死体を見てから顔色が全く良くなならない宇白を見て言う、彼女は数秒俺の顔を見た後、いきなり顔を伏せて説明を再開する。

「この町の地図を見た？このジャングルはなぜか似ても似つかない『林』って設定になってる、ソレはこのジャングルの空間を無理やり捻じ曲げてそう見せているだけ、普通の人間が通っても普通の林、だけど能力者が通るとこのトラップは発動する」

彼女の説明だとこのジャングルは急に現れただけでも俺達が飛ばされたわけでもなく、最初からココにあって、普段はなんらかのミラクルスーパーパーパワーによって『林』に改ざんされているとの事だ。

「今の話でわからないところがある『能力者』？」

彼女は立ち上がり説明を再開。

「能力者とは一般からかけ離れてしまった存在、普通じゃない人間」
例えば？と促す、彼女は振り返り目を静かに閉じた、そしてまたゆっくり開き手を前にかざす。

「具体的に言えばこの町の力は『物』にたよったものになる」

彼女はそこに何かあるかのようにゆっくりと手を握る、その瞬間、何もなかった彼女の手から身の丈ほどの大きな杖が出現した。

「普通能力者は直で能力を使う、だけど私達は能力を具象化でき
てその『物』を使って能力を使う」

彼女は杖を焼け野原の方角に向けて大きく振る。

「何も使わない能力者を1にするなら『物』を通して能力を使う私
達は7つて物かしら、能力に対しての考え方の違いによるものらしいわ」

一通り説明し終わると杖を振った方角、丁度あの焼け野原あたりに
大きな火柱が現れた。

その火柱は焼け野原の何もかもを焼き尽くして消えていった。

「つまりこの森に来た生徒はその素質がある者だけ、と」

火柱に腰を抜かしながらも質問する。

「ええ、新人生全員ね」

彼女はさらっと返してくる。

「昨日の晩に『夢』を見たってみんな言っでなかった？それが能力開花のスイッチ、夢で自分の能力の内容、その使い方を覚える」

「俺は昨日みんなが言っでいたような夢は見えてない」

「あなたは昨日も迷い込んだでしょ？この場所に、つまりあなたには能力の素質が産まれたときからあった、だけど産まれたときから使っでないから使い方を忘れてしまっでる」

「俺は昨日どうやってあの軍人を倒した？何故外に出られた？」

「あなたは生きていて、証明なんて要らないんじゃない？」

やっぱり昨日の事を知っでいて、つじつまも合う、みんなは昨日の夜開花したから昨日の朝はふつうに『林』のココを通過した、だが俺は能力に目覚めていたため『ジャングル』を歩くハメになった訳か。

「この状況が大掛かりなトリックじゃない証拠は？」

「敵が居る、それを自分の能力で倒せなければ死ぬ」

「軍隊か？それともオカルト教団、スラムとかじゃないだろうな」

彼女はため息を大きくつく。

「敵は能力者、『物』を使って戦う私達とは違って『人』として能力を出す人達、手から炎だしたり、ね」

あの軍人を例に挙げる。

「人数」

「ほぼ無限、ココでは歳をとらないから、まさにトラップの真髓かもね」

「歳をとらないんだろ？死なないじゃないか、侵入者を結果的に殺すのがトラップってもんだろ？」

「怪我とかしても治らないの、ここにいとね、老けない代価みたいなもの、そこで学校の生徒達が演習で入り、練習の実験台にするの」

老けなかったり怪我が治らなかったり、もろもろが便利だな、オイ。

「便利になるように作ったんだから当たり前じゃない」

コイツ、人の心を読みやがる。

「戦いながら学校に行くのがこのミッション、そっちの彼は戦えないみたいだからあなたと私で戦う、わかった？」

「俺だって戦える」

彼女の発言にどうしても訂正を加えたかったのか気持ち悪そうに宇

白が反論する。

「無理、話にならないから黙ってついてきて」

彼女は宇白に戦力外通知をつきつける。

「詳しいんだな現状、能力のことも」

「私の力は血族的な物だから、そして産まれた時からこの町に住んでるしね、まだ聞きたいことは？」

じゃあ付いて来て、と彼女は自分の能力で草木を焼き払いながら進んでいく。

「宇白、歩けるか？」

宇白に肩をかしながら俺も後を追う。

「名前を覚えてくれ、戦闘になるなら知っていたほうが便利だ」

「まきしま 梢、うしろえ 填島の方で呼んでね、名前の方は反吐が出るくらい嫌いだから」

女の子が反吐とか言っちゃダメだろ。

「比喩的表現に女も男も無いと思うけど」

また読まれた。

それから無言のままこちらのペースを考えずどんどん進んでいく

墳島を追い、長い時間歩いた。

「敵が近づいてる、そのカスを草むらに捨てて臨戦態勢をとって」

カス：宇白の事か？なんて思っていると宇白は俺の手を無理やり振りほどいて臨戦態勢をとる。

「俺が仕留める」

宇白は墳島に強い牽制を送った後に目を閉じてそこにある何かを掴んだ。

その瞬間に草むらから軍服の男が宇白に飛び掛る。

男は持っていたナイフで宇白の首を狙ったが宇白はの能力らしきものが先に男を地面に叩きつけていた。

「すごい、すごいすごい、コレが俺の力、俺の ちから」

宇白はその場に倒れこんだ。

「オーバーワーク、彼は自分の力を制御しきれない」

墳島は意識をまだかろうじて繋ぎとめていた宇白の頭を蹴り飛ばし、腕を掴むと草むらに放った。

「敵を倒してくるからあなたはココで自分の能力がなんだったか思い出して」

それだけ言って草むらに入っていく、思い出せって言われても・・・

ガサッ

草むらから墳島と入れ違いで一人出てくる、手にはサバイバルナイフ、だがさっきの奴とも焼け野原にいた奴とも違う軍服。

そいつはこちらの面子を確認し、男か、と呟いてこっちに向かって歩いてくる。

ある一定の距離まで来た男はピタリ止まり、ナイフを構える。

俺は無意識のうちに何かを掴む、ポケットの中にあつたビー玉である。

ビー玉を握り締め考える、あの焼け野原にあつた死体の傷口はなにか大きい物が通過し、そのまま持つて行かれた、そんな傷口に思えた、無意識のうちに俺が倒したんだとしたら俺の『物』^{のうりやく}は鈍器。

俺にはみんなと同じように何も無いところから武器を出現させることは出来ない、じゃあドコに武器があるのか、おそらくそれはこのビー玉のはずなんだ、俺が死んだときに持っていたこのビー玉。

ビー玉が形を変える。

コレが俺の…武器か、手にはヨーヨーが輝いている。

男がスタートを切る、ナイフを振り回してくるが俺が思ったよりも白兵戦は得意ではないらしく俺の姿を捉えきれずがむしやりに振り回しているようだった。

俺はもっているヨーヨーで男を殴る、仰け反る男、男はナイフを捨てて構え直す。

この男は能力をつかった方が強いのだろう、こちらに歩み寄る男。しばらくすると男の動きが止まる。

「何をした？」

男は身を震わせながらこちらを見てくる。

さあ見せてくれヨーヨー、お前はどんな力だ？

「わからない、力の使い方が…」

男はその場に崩れる。

「体に力を入れるって、どうやるんだっけ？」

その内口もパクパクと動くだけになった、声の出し方も忘れてしまったのだろう、しばらくすると息もなくなり苦しみだす。

俺はもう一度ヨーヨーで男を叩く、男は苦しみ方を忘れるように死んだ。

人から記憶を消す力、か。

ヨーヨーをビー玉に戻す。

「よかった、一人取り逃がしたから殺されたかと思ってた」

墳島が戻ってくる。

「わざと、だろ？サディスト」

俺が今出来る最大の皮肉を言つと墳島が笑つ、近づいてきた墳島を見ると左肩から血が出ている。

「おい、お前怪我してんじゃん」

大丈夫よ、と治療しようとする杖を振り回して追い払う、コイツは俺をなんだと思ってやがる。

「敵は腕をよく狙ってくると思うから注意して」

また大きいため息をつく。

「何故必要に腕を？」

「『物』が能力である私達にとって武器を握れないことは死よ、覚えておいて」

腕を取れば俺らは能力もだせなくなる訳だ。

「だからって女子の腕まで」

人間としてどうかと問う。

「あら？腕を取るなら女の方が得が多いと思うけど？」

？いや得も何も違いはないだろ。

「だって抵抗されない方がやりやすいでしょ？」

「お、お前な！」

強く睨む、だが続きを言おうとすると埴島はいきなり上着を脱ぎ始めた。

「ああ、言い忘れてました、治療をしたいからあちらを向いていてくださる？し・ん・し・さ・ま」

埴島は急に敬語になりこちらをおちよくってくる。

俺は小学生以来の180ターンを見事に決めて草むらに向かって歩き出す。

「そつゆつ事をワザとやるのは卑怯だ！」

逃げ際に反論する。

「そついえば先程治療を手伝おうとしてくれませんでした？今からでも間に合うなら少し手伝ってもらいたいのですか？」

「期限切れだつての！！」

嫌いだ、話をそらすのが上手い大人みたいで、ココを出たら二度と話もしないだろう、少なくともこちらからはしない。

しばらくすると埴島は治療が終わったらしく草むらかた出てきて出

発の準備をしている、そして出発する時にああそうそう、と思い出したようにこちらに顔を近づけてくる。

「私はあなたみたいな純粋な狗、もとい可愛い子供、大好きですよ」
いち早くここから出たくなった。

歩きに歩いて2時間は経った、先の戦闘から敵との遭遇は無く填島は退屈だため息をついている、ため息は癖なのだろうか？

「出口よ」

目の前には校章が小さく彫つてある大木があつた、填島は校章に向かって歩いていき、木の中に飲まれるように入っていった。

「なるほどね」

俺も続いて木に入ると目の前には学校があつた、振り返り校門とこまでの間にある林の捻じ曲げられた道を見るがそこには誰も立っていない、変わりに校門を潜った人が一瞬で消え、疲れた表情でこちら側に出現してくる。

昨日心配されたのは校門であの空間に入り、なんとかして抜け出したことにより、中途半端に道の真ん中に出現したからなのだろう。

「時間が進んでない」

「よく見てるのね、そう、あの中に居ても時間はすすまない、捻れた空間にいた時間はこっちの世界では0に等しい」

つまり俺らがどんなに早くゴールしようとも俺らより先にあの空間に入った人がいたらそっちの方がはやくでてくるって事だ。

そこに立ち止まっけていても仕方ないので学校の玄関に行く、すると昨日と同じ場所で受付があり、そこで先生達が待っていた。

「合格おめでとう、そして入学おめでとう、現状を説明しよう」

一人の先生が誰もいない教室に案内してくれた、俺と埴島は説明を受け、宇白は保健室に連れてかれた。

「何か聞きたいことは？」

なんでも良いんだよ、と微笑んでいる先生に取りあえずなんでも聞くことにした。

「都合よく新入生が能力者なのは何故ですか？」

ジャングルの中で疑問に思ったことを聞く。

「中学の時に筆記試験をやらなかった？我々はもうその用紙に触れるだけで相手が能力者かどうかわかるレベルまで進歩している」

用紙の内容が白紙であるうが関係ない、俺がココに来ることはあの用紙を後ろの席にヤツに手渡した時点できまっていたっていやな話だ。

「集めるのは隔離のためですか？」

次の質問を出す、考える暇を与えないほうが真実に近い嘘、または

正反対の嘘が出てくるもんだ。

「いや、自分が能力者であることに気づかないで暮らすと成人したぐらいからコントロールが上手く出来なくなり暴走することがある、それを防ぐための学校だよ」

それじゃあ隔離となんら変わらない。

都市区、開発区、農業区、住宅区、こんな狭い町にこんなにも結集しているのはこの町で十分暮らしていけると錯覚させるための物か。

「質問は以上です」

俺はこれ以上の質問を出さなかった、どうせ先生達に改変された情報なら意味が無い。

「じゃあ自分は次の生徒の説明があるので、注意して帰りなさい」

先生が出て行くと同時に填島が立ち上がる。

「私も用事があるから、帰る途中で寄り道しないように」

お前に言われなくとも、そんな事を思いながら保健室に寄っていく。

中を覗いて宇白がドコに寝てるか確認する、宇白のベッドはスグに見つかったが先客がいた、ポニーテールで髪の毛をまとめた女子だった、宇白よ、お前も隅に置けなかったんだな。

仕方なく帰ることにしたが、開発区はまだ不気味でしょうがない。

「少年っ、あたって行かないか？」

聞き覚えのある声に振り向くとあの怪しい男がいた。

「まだまだ冷えるねえ」

またそこから木を拾ってきては火に放り込んでいる。

今日は名前をおしえようと近づこうとする、ついでにこのビー玉のことも聞いてやろうと思ったが、体は動かない。

「どうした坊主、んな怖い目でみんなよ」

意識が閉じていく…

〈another part〉

「どうした坊主、んなこえー目でみんなよ」

俺の声はとどいていないかのように坊主は立ち尽くしている。

「主人の気絶を確認、オートモード展開、『7つの大罪』オールナンバー起動」

再起動したかのように彼の口からでた声は確かに本人の物だったが、だが意識はアイツにもってかれてるようんだ。

「『大罪』！オーバーワークだ、まだ学ラン君はそれには耐えられない」

手ぶら君の手にはビー玉、そのビー玉が瞬く間にトゲ付き鉄球に変わる。

『7つの大罪』の一つ『真実』を創り出す力、呼称『暴食』

相手にぶつけることで効果を発揮、相手に記憶を植え付け操作し、相手にとっての『真実』を創り出す。

あの鎖鉄球にはそんな力がある。

まあアレ当たって耐えられるやついたら凄いいけどね。

坊主が鉄球を放とうとする、だがその体勢のまま倒れこんでしまった、極度のオーバーワークに乗り移ってる本人の体が耐え切れなかったのだろう。

「だからやめとけてのに……もったないなあ」

じゃあな鬼山君、楽しかったよ。

最後に別れを告る。

〈main part〉

意識が戻ってきた、男が遠ざかっていく、男はケケケ、とまた笑っているようだ、そして入れ違うように填島がやってくる。

何かを言っているようだが聞き取れない。

もう、聞き取れない。

〔 another part 〕

駆けつけた時にはもう彼は生きているとは言いがたかった。

「もう聞こえてないんでしょう？」

彼の生体反応の消滅を確認する。

じゃあね、鬼山君。

次はもっと上手くやるから。

最後に別れを告げる

三夜・正義（前書き）

続き！続き！

最終更新終了（だったらしいのにね

三夜・正義

Coghweel

ここに越してきて三日が過ぎた。

一日目はごく普通の日、二日目には通学途中に怪しい男に会って、ビー玉をもらったと思ったら空間を捻じ曲げられたジャングルに放り出され、拳銃殺されかけた、どうやってかそこから脱出し、摩訶不思議な冒険を終えやつとまともな三日目かと思ったらその摩訶不思議がこれからまともになってしまふのよと説明されそれを受け入れるとの事だ。

「用事があるから先に帰る、寄り道しないでまっすぐ帰りなさい」

先生からの説明が終わるや否や填島はもの凄いスピードで出て行った、俺も帰るとしよう。

玄関に着くと宇白の事を思い出す、保健室によって帰ろう。

「宇白く起きてるかあ？」

宇白のベッドはすぐにわかった、だが先客がいた、長い髪をポニーテールでまとめたかわいい女子だ、宇白の裏切り行為に少し腹を立てながら先客に挨拶する。

「今日和真君とジャングルを歩いた方ですか？」

緑の校章を付けている所を見ると新入生のようなだ、そして宇白の名

前をさらつと言うところを見ると結構仲が良いようだ。

「体の限界を超えた能力を使用した、との事です」

填島の言うオーバーワークの事だろう、宇白はまだ目を覚ましてない。

「宇白と仲がいいんだな」

特に話すこともないし、思った事を聞く。

「中学の時のクラスメイトで、私本田^{ほんだ} 桐栄^{きりえ}って言います」

同じ学校から同じ学年の生徒が二人も能力者、かなりの確率だろう、確かに中学の同級生なら新しくココで友達を作るより気が楽だ。

「何か伝える事でも？」

「いや、いいんだ、お邪魔したね」

状況に耐え切れなくなって逃げ出す。

宇白への裏切り者のレッテルを強化し、今日は帰る事にした。

通学路である開発区、日がまだ短いこの季節だと夕方の位を少し越え既に夜だ。

「しょーねん」

聞き覚えのある声に振り向く、あの怪しい男が焚き火をしている。

「家まで遠いのかい？よかつたら暖まっていきなよ」

今日は名前を教えて帰ろう、ドラム缶に当たりに行く、ビー玉のことで聞きたいこともあったしな。

焚き火に向かって歩き出そうとする、が、体が動かない。

「どうした学生君…んな怖い目でみんなよ」

意識が揺らぐ

（another part）

学生君の目つきが変わる

「主人の気絶を確認、『7つの大罪』オールナンバーを起動」

意識を確実に乗っ取られてる、気絶を確認、ではなく無理やり気絶させたのであろう。

「抹殺リスト000『クリフォート』を確認、消します」

少年は俺のあげたビー玉をトゲ付き鎖鉄球に変える。

「やめとけ『大罪』、オーバーワークの域を超えている、本体が死ぬぞ」

無駄だと知りながら一応忠告する、だが鉄球を投げる手は止まらない。

だが鉄球は放たれず、その場に倒れてしまった。

「だから言っただのに、勿体無い」

じゃあな少年、さよならだ。

振り返り歩きだす

（main part）

意識がまた繋がる、宇白と同じ事が俺にも起きているのだらう、体は動かない。

俺の体力を吸い続ける鉄球を元のビー玉に戻す、だいぶ楽になった。

男は振り返り、俺を見捨てて歩き出す。

アレに用がある。

俺に背を向けて歩く男を止めようと体が動く。

俺にビー玉を渡したあの悪に用がある。

そう、俺の目には男は悪にしか見えなかった。

俺はビー玉を握る、体はまだ限界じゃないハズだが、意識が持たない、なのに俺の体は勝手に思い、勝手に動く。

消してやる、あの人間を被った悪人をかき消してやる、俺をこんな

ふつにした原因のあいつに俺の全力を叩き込んでやる。

何故、俺はこんなにもあの男を憎んでる？ そんなことは関係ない、関係ない、関係。

意識が千切れるように消える。

そしてパソコンのように再起動する。

「本体を起動、『7つの大罪』の起動を半停止」

意識がとてもハッキリする、俺に気付いた男が振り返る。

「へえ、『7つの大罪』との繋がりを切ったか」

男の興味が俺に戻った。

「やあこんばんわ、クリフォートさん、聞きたいことがある、セフィロトはどこだ？」

俺の体は勝手に話始める、俺の意識とは別に何かが機能している、そして森にいた男が言っていた喫茶店（？）の名前を言う。

「ちょっと置いて来ちゃったみたいだね、君は…何だい？」

手ぶらなんだ、と男は両手を広げてアピールする。

「何にも揺るがない絶対の『正義』ですよ」

俺の返答にケケケ、と男は高笑いする。

「なるほど、セフィロトの奴もやってくれる、『大罪』の前に『使命』を忍ばせたわけだ」

男はこちらに向かって歩いてくる。

「大罪の力もどうも弱い訳だ、『使命』なんて能力が先に体にあつたらお互いに消しあうしかない、大罪の半分ぐらいを誰かに受け渡したってことか」

ああ、と俺が勝手に返答し、俺はビー玉を握って武器に変化させる、ビー玉はかすかに覚えているトゲ付き鎖鉄球に変わる。

そして思いっきり男に向かって放つ。

男は顔面めがけて飛んでくる鉄球を片手で止められる、あの鉄球を片手で…、あの男は人間ではないだろう。

「大罪の『武器』に『使命』の力を載せて放つ、器用だね揺るがない正義さん、セフィロトを忘れてきた俺には正にお前の存在自体が毒」

「あんま喋らない方が言いと思うぞ、ご主人の意識は起きてるから俺のもう一つの意識が男の発言を制止する。

鉄球を手元に戻してその形を変える、鉄球は中国映画とかでよく見る刀身の平べったい青龍刀に変わる。

「『結束』を創り出す力、呼称『傲慢』、何かと何かを繋げる能力、

それは戦闘用の力ではない筈だが？」

ビー玉の事を知り尽くしているかのように男は解説じみた発言をする。

「『大罪』、ならな」

俺は飛ぶように駆ける、刀をなれた手つきで振る、その一閃を男は素手で止める。

パス、と物が人の肌に当たる音がした、男は体を鋼鉄に変えているわけじゃない、何か不可思議な力を使っている。

「刀として使いやすい、と言った所か？」

一歩分後ろに後退し、また敵に飛び込む。

「それとも俺と何かを繋げるのかな？それにしても痛いねえ、武器なんて俺には利かないハズなのによ、『使命』の力のせいかな？」

武器を止めつつ会話する所をみるとかなり余裕なようだ、一歩引き、また飛び込む。

最初は一秒に一閃、次の攻撃は一秒に二閃、次は四閃、まだ速度を上げる体。

「おお、速い速い、体は普通の人間なのによ、少年の潜在能力は凄いな」

男は理解できてない、いや見えていない、だが俺には見えている、

次の一撃で終わる。

刀は男を普通の人と同じ状態にもどしていく、男が切られても切られない『条件』との繋がりをこの刀は切り裂いていく。

固く刃が通らない男の肌を俺の一撃がきまった、男の腕を切り落とす。

男は驚きを隠せずに後退する。

「何をしたんだい？『大罪』の力じゃないね」

「帰れよクリフォト、セフィロトを持たないあんたじゃ俺は殺せない」

男は笑い、戦闘態勢を解いた。

「コレはありがたい」

こちらに近づいて腕を拾い上げる。

「意識はあるんだろ？鬼山君、また会おうな、俺の名前な『クリフォト』ってんだ」

そう言つて深くお辞儀した後、廃ビル中に消えていった。

「『正義』の起動を解除：ご主人、死なないでくれよな」

ふう、とため息をつき、俺の体は意味不明のことを言いながら目を閉じていく。

目を開けると体に力が戻る、その瞬間に息が出来なくなる、まるで一日中自分の全速力で走っていたような、心臓の速さも尋常じゃない。

「生きてる？」

填島？なんでこんな所にお前が・・・。

意識がフツとなくなった。

↳ another part

彼は勝ってしまった。

この世の大罪とゆうなの大罪を産み出していく男をいとも簡単に撤退させた。

「生きてる？」

私が声をかけると安心した表情で彼は目を閉じた。

彼なら、もしかすると。

私は確かめるように頷き、彼を彼の家まで引きずっていくことにした

三夜・正義（後書き）

計画性の無い小説で今まで書いた小説の中身が少しだけ変わった
しています

すみません

四夜（前書き）

今回は短いです

最終更新終了（もっかいぐらいあるかも

四夜

コグホイ

ここは、家か？

いつ帰ってきたんだか、期日で言えば今日は休日。

俺はもう一度寝ようと目を閉じる。

「寝るの？じゃあ私は帰るから」

その声で俺の目はその声にこじ開けられる。

起き上がるとそこには填島が帰宅の準備をしていた。

「いや、おまえなんで？」

言い終わると体の異変に気づく、体中が筋肉痛で痛い。

「昨日の晩に開発区で会ったでしょう？とゆうかあなたは寝てただけ」

「それを見かねてココまで運んでくれた、と」

そう、とだけ言って填島は出て行くとする。

「待って」

俺は体に鞭打ち、起き上がって墳島を呼び止める。

「ありがとう」

「貸しにしとくわ、後寝言と寝相のこと黙っててあげるから」

反論も言わずにズカズカと出て行く、俺の中で彼女が最強のランクに位置づけられた瞬間だった。

とにかく体がヤバイ、だが誰の策士の仕業か知らないが飯がない、とゆうか食い散らされているところを見ると墳島の強襲によって全滅したようだ、使い物にならない体をふるい、買い物に出かけることにした。

だが一步一步に慎重になってしまい、ちょっとばかり、いやかなり変な歩き方になってしまっている、今クラスの誰かに会ったら見事、俺は学年一の笑いものだ。

「はい、今日はカレーにしますから、はい」

店に入り、簡単に出来る料理の食材求め彷徨っていると青果コーナーで聞き覚えのある声がした。

「はい？え？反応ですか？」

前にココで買い物をしていた女性だ、また携帯で通話しながら買い物をしている、しかも休日なのに制服を着ている、校章の色は赤、一つ上の二年生だ。

「いえ、それっぽい人はいるんですけど、なんかあっちがこっちに

気づいてるみたいで」

女性は周りを確認するようなフリをしながらこちらをチラチラと見てくる…歩き方！？歩き方なのか！？

「ええ！？今ですか？人を確認したからいいじゃないですか？…わかりました」

通話を終了してこちらに向かってくる、そんな顔して脅迫ですか？

『だまって欲しかったらホニヤモニヤ円渡しなさい』

とかそうゆうノリの人だったのか？

「少しお付き合いいただきますよ、鬼山…コレなんて読むんですか？」

手に持つてる手帳を見せてくる、顔写真と名前、学年、他もろろの個人情報を書いてあってそこに書いてある俺の名前を指差す。

「りゅうじ…です」

「そう、その龍爾君にお話があります、少し買い物にも付き合ってください」

今の手帳、普通に欲しいぞ。

彼女はカレーと思われる材料を三人分購入し、付いて来てくださいね、と先導する。

彼女も俺が見ていた人間の中では美人に入る、能力者は比較的美人なのか？

髪の毛はかなり短く茶髪だ、目が少しツリ目なのが唯一のマイナスかもしれない。

「急にすいませんね、私 葛城 笹^{かつらぎ ささ} って言います、今回ついて来てもらうのにはちょっとした理由がありまして」

ふう、またか、こつちに来てからはこんなことが多いな、まあ『ジヤングル』の通過は全員やることだが、昨日は昨日で『人』の形の化け物と戦わされたワケだ。

「できれば能力繋がりトラブルはやめてほしい」

てかそれに巻き込まれるかもしれないのに疑いなくこの人に付いていく俺もどうよ？

「その判断は私の話を聞いてからでも遅くないと思います」

ここまで言われて話も聞けないとは言い辛い、俺は黙って付いていく。

彼女の家は開発区の時計塔にあるそうだが、裏口から入って長い階段を登って行く。

「家の主人の好みなんです、高いところ大好きで」

どうやらその説明会にもう一人参加する奴がいるらしい。

「ここもいつか取り壊されちゃうんですか？」

とりあえず開発区に何が建てられるかはわからないが、他の建物が取り壊されているところを見るとここもそう遠くないうちに取り壊されるに違いない。

「いえ、ここは買収済みなので」

時計塔まるまる一つを…ですか？

「只今戻りました」

時計塔の齒車が動く機関室の上に彼女達の家はあった、彼女は奥に俺を案内する。

案内されたのは大きな部屋だった、座って居てください、と中央に互いを向き合わせるようにおいてあるソファに座らせればし待たされた。

「遅くなった」

一人の男が入室する、男も制服を着ていてバッジは赤、2学年の先輩だ。

短髪が黒いハリネズミを思わせる、目はツリ目なんてレベルを超えていてかなり怖い、てか身長が大きい、170ぐらいはある。

俺と対になっているソファに座る。

「鬼山だな、紫藤^{しゅうとう} 圭^{けい}だ、紅咲町の断罪者派遣代表だ、こいつの名

前は聞いたか？」

ソファに座らず圭の後ろに立って待機している葛城を指差す。

俺が頷くと話を始める。

「本部へ登録していない『断罪者』は始めて見た、説明してもらおう、本部に行っていない理由も含めてな」

さあ、と俺に話を促すが、俺にはよくわからない。

「…笹、まだ話してないんじゃないよな？」

葛城は苦笑いしている、紫藤は葛城を一度にらみ、話を再開する。

「鬼山、昨日あたりに能力の話を聞いたばかりで混乱しているかもしれないが、こっちの話はお前にとっても重要な話になる、少し聞いてくれ」

制服の仕様を遥かに超した着こなし方、姿勢、何をとっても一流そうな紫藤の話を蹴るなんて事は出来なかった。

「能力の中でも君の力は普通の能力じゃない、能力にはかわらないが、ある特別な位置づけをされているその位置づけが『断罪者』と呼ばれる能力者だ」

少し長くなる、と紫藤は葛城に飲み物を持ってくるように言うと、葛城は部屋から出て行った。

「『断罪者』はこの町に来てから開花する力じゃない、産まれたと

きから」

一旦話すのを止める。

「話づらい、普通に喋っていいか？」

紫藤の話し方が軽くなる…え？

まあコッチに拒否する理由は無い。

「良かった、笹にはきつく止められているんだがな、じゃあ続ける、産まれたときに『断罪者』ってやつは己の中に『使命』を授かる、ある人物の手によってな、その使命の内容によって力の強さが変わる、そして使命に同じ物はない、『使命』は唯一無二、1000年経ってもかぶることはない」

紫藤はポケットからタバコを出して吸い始める。

「『断罪者』は世界に何人もいてな、俺はそんな中でも結構強い『断罪者』、つまり強い『使命』を授かったので、意味本部よりも重要な場所になるこの町を管理をしている」

立ち上がって続ける。

「本部よりも？」

普通本部が一番大切な場所じゃないか？

「そうだ、その大切な物が無くなると俺達『断罪者』は普通の人間になっちまう」

そこらへんはまた後にしよう、と次の話に移る。

「俺らの活動内容は… あー、『7つの大罪』って知ってるか？」

頷く。

「だよな、名前ぐらいなら誰でも知っているモンだ、俺ら『断罪者』って名前はなその『7つの大罪』を裁くことから名づけられている」

「裁く？」

法的な範囲の中で人間として裁くなら能力なんて無くてもいいんじゃないか？

「『7つの大罪』、それに該当する人間を『大罪者』って呼ばれる」

俺の理解を待つために少し間を空ける。

「『7つの大罪』は『断罪者』と同じで能力として人に乗り移る、かなり強い力だ、歴史的にも『大罪者』の方が古いつて事らしい」

『7つの大罪』、森の男が言っていたことだ、こんなにも能力が分かれるならば学校で説明の一つでもあっても良いと思うのだが。

「7つに分かれた？」

俺の問いにああ、と返答し紫藤は話を続ける。

「確かに集合してた時はやばかったらしい、2000年ばかり昔の話だ、だが昔の断罪者さんがバラツバラにしたんだと」

少し内容は違うがそれなりに聞いた話と同じだ。

「それから『大罪者』はただ単に狩られる側になった、力の優勢が一気に逆転してな」

「後何人残ってるんですか？」

俺の指摘に紫藤の顔は渋くなる。

「そこだ鬼山あ、『大罪者』の厄介な理由を教えてやる、…やつらの能力は蘇る」

蘇るって言い方は何かちげえな、と説明をしなおす。

「例えば『大罪』が寄生した能力者がポックリ逝っちゃうとな、その能力は違う人間にそのまま乗り移っちゃう」

「じゃあ完璧に消すのは無理なのでは？」

その通りだ、と二本目のタバコに火をつける。

「確実に消す方法は発見されてるが、恐らく不可能って話でな、俺達は違う方法を…例えば『大罪者』7人を同時に消すとかな」

「確実な方法？」

やっと核心だな、と疲れたような表情を浮かべる。

「『7つの大罪』が一個でも破壊されるとその能力を違う適合者に移すためにある象徴が現れる、『大罪』自体に転生機能が備わっている訳じゃないから、『クリフォト』と『セフィロト』昔の伝承に伝わる樹の名前だ、知ってるか？」

その名前に強く反応する。

「アイツが樹？」

昨日の夜『クリフォト』は人間だったハズだ。

俺の質問に対して大きく態度を変える紫藤。

「会ったのか？」

確かにクリフォトは人間らしくなかった。

「そいつらは、姿を変えてこの町に ある一定の周期、またはさつき話した『大罪者』がやられると降りてくる、その姿は『人』と『物』、片方が『人』時はもう片方は『物』になっている、『クリフォト』はこの世に『大罪』を撒き散らし、『セフィロト』はそれを裁く『断罪者』をこの世に使わす」

「『クリフォト』を消せば、『大罪』はこの世界に生まれなくなり『断罪者』の勝ち？」

「そうだ、逆に『セフィロト』がやられれば『断罪者』はこれ以上増えない、それにしてもよく生き残ったな、人ではとにかく能力者でも奴ら『世界樹』には敵わないのに」

昨日、クリフォトに出会い、戦闘になって奴を追い返したことを伝える、その途中で葛城さんが戻ってきた。

「良い紅茶なんですよコレ、ってこらあああ！紫藤さん、タバコ、ええええええ??」

かなり錯乱している。

「真面目に話すって約束して下さったじゃないですか、嘘だったんですか？」

ほぼ泣き目である、コレはまた何というか、かわいい。

「うつせえ、最初は良かったんだよ、でも途中からガマンできなくなっちまって」

紫藤を叩きながら葛城さんの馬鹿連呼攻撃は続く。

「つか話の腰折ってんじゃねえよ、今大事なことなんだぞ」

俺をチラッとみて葛城はすみません、とお茶を配った。

「じゃあ今回はクリフォトが『人』、セフィロトが『物』、いや『武器』になって降臨している、そうだな？」

「セフィロトは置き忘れてきた、と言っていました」

そのおかげでお前は生きてるのか、と紫藤は一人で納得している。

「ジャングルの空間にはもう入ったのか？」

林に強引に捻じ曲げられていた空間の話をし始める

「そこにいた、人として能力を使う普通の人々、アレは世界樹を奪い取りにきたもの達だ、世界樹は相当な力をもっている、世界を改変できるくらいにな、そいつらから世界樹を守るのも俺らの仕事、ほとんどは紅咲高校に世界樹が潜伏しているってデマを流してあのジャングルの空間に閉じ込めるんだけだな」

学校との関係は確実なものだろう、学校側はほとんど利用されているに近いが。

「鬼山、お前の『使命』の形はなんなんだ？」

悪いが全く覚えていない、その感覚も見えない。

「まさか知らないのか？」

不思議なこともあったもんだ、と紫藤は続ける。

「まあいいさ、使えるならな、ちなみに俺の能力は世界の『矛盾』を無くすこと、だ」

「私は様々な『原因』を無くすことだそうです、つまり私達は『セフィロト』『クリフォト』を破壊するのに一番適しているんです」

紫藤に続き葛城が自分の『使命』を説明する

『人』や『物』でないのにその姿をしている『矛盾』、『大罪者』

を生み出す『原因』を無くす力、確かにこれ以上のコンビはいないだろう

「そこで『クリフォト』の消去の話をお前にも手伝って欲しい、戦闘経験がないと話にならないからな」

俺がこのミラクルワールドから開放されるにはコレ以外の方法はおそらくないだろう、俺はこの二人に協力することにした。

「んでいきなり嫌なニュース、4日前になるが我々『断罪者』の組織で『7つの大罪』の同時消滅に踏み切ったんだが、『大罪』はちゃんと転生を成功させている、当面の目標はこの町にいるだろう『7つの大罪』の適合者7名の探索だ」

7人を全員破壊しても転生に成功する・・・、他の方法を模索しながら転生先を見つける、こんな具合らしい。

話は終わった、体も痛いし帰ることにしよう。

「じゃあカレーを食べていってくださいな、三人分出来ているので」
思えば自分の買い物をしていない、今日はご馳走になっていくことにしよう。

（another part）

今回の彼はまた一步マスを進めた、毎度毎度クリフォトに会ってオーバーワークを起こして死なれてはたまらない。

「さあ、もう一マス進んで頂戴ね、鬼山君」

私は彼を観察し続ける。

五夜（前書き）

内容がグデグデになりはじめました
最終更新終了（恐らく）

五夜

）cogwheel）

休日二日目、俺は都市区を歩くことにした、昨日葛城さんと約束した『大罪』適合者の搜索だ。

『7つの大罪』は名前通り7つの大罪、つまり『大罪』適合者は世界に7人、一人でも欠ければあの『クリフォート』が違つやつに乗り移らせて居しまったため、その構造を逆手にとる。

『大罪』適合者を一人確保、俺達の万全の状態になったら『大罪』の媒体を破壊、この町に降りてくる『クリフォート』をなんとか見つけ、なんとか破壊する、後半は作戦としてはアレだがコレしか方法はないだろう。

『大罪』に取り付かれるとその『大罪』に合う症状が働いてしまうそうだが、『暴食』適合者は食欲を抑えきれなくなったり、とそんな感じ。

まあすぐに見つかるハズも無く、都市区にある図書館に休憩しに来た。

「こんにちは」

声がした方に顔を向けると一昨日保健室で宇白を看病していた女性が立っていた。

「本田、さんで良かったですか？」

はい、と笑顔でこっちまでスッキリしそうな挨拶を返して来た。

「名前聞いてなかったの、なんて呼べばいいかな？って」

そういえば、クリフォートの時もそうだったが、俺って名乗り忘れすぎ、もしかしたらクラスでの自己紹介の時も俺だけ挨拶をしなかったかもしれない…それはないか。

「龍爾って画数多いですね、相席しても？」

断る理由が無い、俺は彼女を向かいの席に招く。

「宇白はどうですか？」

アレから連絡を全くとっていないので心配だった。

「もう人並みに動けますよ、でもあれから毎晩うなされていて」

…、おそらく正面から見たら今の俺はサルに最も近い顔をしているだろう、てか今なんて言っただよ彼女。

「えっと、毎晩？」

二人はとても親しいんですねえ、と意地悪そうに言う。

「いえ、そうじゃなくてね、ちょっと家も近いし、看病もしてくれる人居そうに無かったの」

顔を赤く染め必死に弁解する本田、コレは宇白にはもったいない人

間である。

「悪ふざけが過ぎた、冗談だ」

ほっとしたのか彼女は胸をなでおろし、辺りをみながら申し訳なさそうにする、見れば図書館の係員の人がこつちをキツイ目つきで睨んでいる。

ハハハ、とお互い顔を突き合わせて笑う。

「龍爾君も本好き？」

話を振られる、こつちに引つ越してから家での生活はほとんど書かれていないが俺は結構読書家だ。

「どんな本を読む？マンガはナシの方向で」

最初に会ったときとまるで印象が違う、最初に会った時は：敬語じやなかったか？今はなんだか小学校あたりから同じクラスであり続けたかのようなフレンドリーな感じだ。

「推理小説を少しね」

以外、と彼女は呟いた、その一言は俺の心臓に深く突き刺さる。

「この本さ、推理小説なんだけど、結構おもしろいんだよ」

本田は持ってきた本の一通りのあらすじを俺に話す。

「その本の犯人、息子でしょ？」

本田はその本の結末を知っているのか驚いた表情を見せる。

「あ、読んだことあるとか？」

推理だよ、と言った俺に何か火をつけられたように推理小説の棚から本を沢山持つてきて本を開き構える。

「その推理、見せてもらおうじゃないか」

君では絶対に無理だろうね、と言葉使いを更に変えて一度読んだことがあるだろう小説を開く。

それから俺と本田の意地の張り合いが始まった、犯人推理勝負は本田があらずじを話し、俺が犯人を当てる、それだけの事だったのだが非常に盛り上がり、昼前に会った俺達は3時を少し過ぎるぐらいの時間まで勝負を続け、結果は本田が選んだ本の犯人を全員当てた俺の勝ちになった。

「龍爾君、ホント頭いいんだね」

借りてきた本を二人で本棚に返していく。

「作者の書きたい方向性を考えるのも推理小説の鍵だよ」

本田に少し尊敬された、だが推理小説は主人公より早く犯人を当てる本ではないことをよく覚えておいて欲しい。

「ところで本田さんさ、その話方って元からだっけ？」

本田は困った表情をする。

「和真が倒れたぐらいからかな、私意識しないと敬語で話せなくなっちゃって」

そうか、宇白が倒れた辺りから…。

「『大罪』に取り付かれると本人の意思に関係なく、取り付いた大罪の症状みたいなモンが適合者に現れ始める、コレ覚えという損ないぞ」

搜索の上で発見の手がかりと俺に強く言い聞かせた紫藤の発言が思い浮かぶ。

「体に異常は？」

「ないけど、どしたの？龍爾君怖いよ」

態度の変化を読まれる。

「能力、本田さんは自分の能力って細かくわかってる？」

本田は説明をしてくれた

「私の能力は地脈みたいなものを武器の扇子であつめて指先に集中させて撃つたりするんだ、それが？」

どうやら嘘はついてないみたいだ。

「なんでもないよ、帰ろっか、送るよ」

本田は一度遠慮したが、二回目は帰り道が一緒のことを理由に帰ることになった。

「やっぱ変かな？喋り方とか、しぐさとか、行動とか」

帰り道のとちゅうで本田が聞いてくる。

「私さ、和真に前は『君』つけてたでしょ？最近はとっさに出ると和真、和真って呼び捨てになっちゃってさ」

なんか変な感じなんだ、と打ち明けてくる。

「中学校はあんなにおとなしかったのに、とか和真言われると前の方がよかったのかなあ、なんてね」

宇白、学校の平和はお前にまかせた、だから代わりに本田さんの安全は俺がまもってやる、てかお前にはもったいない、宇白よお前何様？

「宇白もそんなこと言う奴じゃなくなかったか？」

「そうなんだよね、なんか最近彼もいきなり変わってね、なんか欲しいものとか増えて、食欲増して、その割りになんでもかんでもめんどくせえ〜って」

…まさか、な。

俺は一瞬頭の中にできた疑いをかき消す。

話に話して住宅区にまでたどり着いていた、楽しい時間はすぎる。

「ありがと龍爾君、俺こっちだか」

言いかけて止まる。

「私の家こっちだから」

言いなおしてからエヘヘ、と笑い、家に歩き出す。

さて、俺は住宅区にある公園に向かう、今日の探索の結果の報告に
いかなければ。

公園には初めて訪れることになるが大きな花壇や遊具などがかなり
充実していて少し公園のレベルを超えている。

「早かったな鬼山あ」

公共の場の公共のベンチで完璧に制服を着こなしながらタバコを吸
っている型破りな男がそこにいた。

「約束の時間の前に来るやつは嫌いじゃないが、少し早すぎだな」

もったね、と呟きながら紫藤は吸い終わってないタバコを携帯灰皿
におしつける。

「俺らは収獲一個、そっちはどうだった」

携帯灰皿をポケットにしまいこみ、紫藤は仕事の話をはじめ。

「気になる噂を一つ」

やはり見過ごすことが出来ない、宇白がそうだったら俺だけでは到底対処しきれないからだ。

「宇白 和真は大罪適合者、だろ？」

俺の噂を紫藤はピシヤリと当てた。

「こつちも同じ内容だ、宇白はテメーのお友達だったか？」

「はい、俺にしてはよく話したほうだと思います」

「明日の放課後に捕獲を開始、お前は作戦に出なくて良い」

紫藤は俺の反論も聞かずに帰っていった、お前では足手まといだといいたげな態度で。

〔 another part 〕

「俺は…私はどうしちゃったんだろうか」

鏡に向かい自分を取り戻すように一人称を確認する、だんだん戻れなくなってる事をひしひしとを感じる。

「ヘッポコ概念がこちらに来てるのね」

真後ろにいた人間に私は全く気づけなかった、鏡越しにいる人間は私の影に丁度隠れて姿を見せない。

「元々ヘツポコには適合者なんて無理な話だった、無理にあいつが『大罪』を移動させなければこんなことにはならなかったのに」

振り向けない、振り向けばもう二度とこの世界を見れない気がして。

「あなたも手遅れにならないうちにヘツポコ宇白を救ってあげてね」

その名前に振り返るが、もう誰もいなかった。

六夜（前書き）

今回は…戦闘のみ？

六夜

コグホイ

今日は登校中から落ち着けなかった、先輩達は今日には宇白を捕まえて時計塔のどこかに閉じ込めるだろう、学校に着くまでに見つかればと思ったが通学路に宇白の姿は無く、とうとう学校についてしまった。

「新生はコレ持ってっ、これないとまたあの『ジャングル』行きだよ」

先生が小さな紙を生徒手帳に挟むようにと配っている、俺ももうあの『ジャングル』空間は御免なので列に並ぶ、が列はなかなか前に進まない、先生が配る枚数でも間違えたのだろうか。

長くなりそうだ、とため息をつく

「『7つの大罪』の半身を確認、只今より奪還する」

声の方向に振り向くと宇白が俺の腕を掴んでいる、そして俺の顔に一発強烈なパンチを繰り出した後、仰向けに倒れようとする俺の足を空中でキャッチし、そのまま『林』の空間に向けて投げ込む。

『ジャングル』の中に叩きつけられる、俺の後を追うように宇白も空間の中に入ってきた。

宇白は両手でやっと持ち上げられるくらい重そうなハンマーを取り出す。

銀の装飾が施されているそのハンマーはかなりの大きさで、持ち合
わせたわけではなく、宇白の力である^⑨と推測される。

声、体は宇白のものなのにあの喋り方と言い俺を投げ飛ばす怪力と
いい他人にしか思えなかった。

だが、力を解放している相手に対して素手では説得する状況すら作
れそうに無い、俺は戦闘態勢に入る、目を閉じ、自分の使いやすい
エモノを取り出す。

この重量感、来た…。

目を開けてエモノを掴む、俺の武器は高確率でトゲ付き鎖鉄球と決
まっていた、ハズだった。

だが手にあったのは無銘、白い厚いカバーの付いた本、鉄球なんて
物には似ても似つかない。

「…マジかよ」

出てきた本につっこむ前に宇白のハンマーが俺の頭部に直撃し、そ
の場で地面にめり込んでしまうような感覚に意識を持ってかれる。

やばい、ふざけてらんねえ、填島のためにも早く学校に行かなきゃ
なんないのに大変なお客が来たもんだ、急がないと填島のタコさん
ウイナーを食いそこね…いやなんの話だし、俺填島とタコさんウ
イナーつつきあうような仲じゃないから、どうやら叩かれた衝撃
で変な錯覚を垣間見たようだ。

とにかく『本』^{ちから}の使い方を知りたい、ヨーヨーの時と同じだ、戦闘しながら使い方を覚えるしかない、俺は宇白から距離をとりながら本を開き、一ページ目をめくる、白紙、二ページ目、白紙、次のページ、白紙…以下略。

残りのページをばらばらとめくり、目を通したが何も書いてない。

宇白は俺を追跡しつつ、俺の本をまじまじと見ながら呟く。

「『7つの大罪』、『嫉妬』、『固有』を創り出す力」

排除します、と計算しつくされた完璧なロボットのようにこちらに歩いてくる。

とりあえず逃げとけ、相手の実力はまだハンマーを振り回しているただの高校生、だがあのハンマーの特質がわからない、一度叩かれた俺はもうその症状が出るかもしれない。

近くの木を曲がり、全速力で身を隠そうとしたとたん、体が倒れる、別に木の根に足を引っ掛けて倒れるなんてベタな一連をやった訳じゃない、背後からあの巨大なハンマーが俺の後頭部にクリーンヒットしたからだ。

俺を殴ったハンマーは地面に落ちる、持ち主がいらない、どうやらハンマーを俺に向かって投げたようだ、変化球ですか？

冗談じゃない、ここで死んだら本田と一緒にキレイな夕日を見に行く約束……してねえ！

だが俺にはその光景が浮かぶ、あの図書館の帰りに本田と夕日を見

に行く約束をしている光景が、叩かれすぎたか？確かにクソ痛い、だが何故こんなにもダメージが少ない？

あんな重量のハンマーに頭を二発も受けているには意識はまだハッキリし、俺の体を逃走へとせかす。

俺は本を抱きかかえてまた走り出す、そしてページをまためくる、今の俺には本^{コイツ}しかない。

そして一ページ目を見直すと一行目に『目次』とだけ書いてあるのを見つける。

背後の確認、敵なし。

俺は近くの大木の根本に隠れる、『目次』だけしかない本。

「クソ、わからねえ、だが宇白が来る前になんとかしないと」

『目次』の隣に文字が浮き出る。

『クソ』『わからねえ』『だが』『宇白』『が』『来る前』『に』

『なんとかしないと』、俺がさっき喋った言葉が目次の隣に浮き出てきた。

「おいおい、どんなトリックだ？」

喋った言葉が区切られて『目次』の隣に並ぶ、俺は『宇白』の部分を読み確かめるようになでる、すると『宇白』の文字以外が消えてその代わりに『宇白』と『暴食』とゆう言葉が浮き出てきた。

俺は『宇白』をなでる、『暴食』が消え『宇白』の個人情報が出て来る。

百科事典…？

「もつと他に無いのかよ」

また区切られて表示される、今度は『暴食』をさする。

『暴食』、『7つの大罪』の一つ、『真実』を創り出す力、殴ったものに『記憶』を植え付けて記憶を改変、真実を奪う、宇白和眞の場合は大人一人でも持ち上げ切れない銀の装飾が施されたハンマーになる。

記憶の改変、タコさんウィンナー、夕日を見に行く約束、アレはこれに書いてあるようにあのハンマーに叩かれたことによる効果…

敵の武器の効果がわかる。

「こいつは使えるもんゲットしちゃったね、うん」

俺の中で反撃ののろしがあがる。

ハンマーの続きを確かめる、先の説明文の最後に『コマンド』なんて表示があつたのでなでてみる。

『叩く』『記憶の改変』の二つが浮き出る、俺は迷わず『叩く』を撫でる。

するとページが一番上にしおりが挟まれるように出現する。

しおりには『叩いちゃめっ』と書いてある、いやこの本どこまで本気なんだよ。

『記憶の改変』のほうを撫でようとする、が強い殺気を感じて手を止める、宇白が近づいているのがわかった。

見つかったら必ず消される、俺は根の間に体を丸め、息を殺す。

「主人を確認、遮蔽物を破壊」

ゴツ、と木を叩く音がする、だが何も起きない、それに安心しすぎたか木が根こそぎ倒れている事に気づくのに時間がかかった。

俺はなんとか脱出する、木が倒れる範囲から転がりながら離れる、身を起こして敵を探すけどどこにもいない。

数秒あたりを見回し、自分の背後にいたということに気づく。

「『大罪』を回収します」

鈍器を振り上げる音、そして、俺を殺し伏せようとハンマーが振り下れ、それが空気を裂く音、俺はタイミングを見計らい振り返る、ほぼ目の前まで来ているハンマーの面を殴り、吹き飛ばされながら相手のエモノの範囲から逃れる。

「敵の戦線離脱を確認、攻撃を続行します」

宇白の攻撃はやまない、俺の体制が整う前に投げられるハンマー、悪いが今の俺に回避できる速さじゃない、俺は目を瞑る、とてつも

なく重いものが俺の体に当たり、そして地面に落ちた。

「敵の損傷を確認できません」

宇白の渋い声が聞こえる。

ハンマーの片面には『叩いちゃめっ』と書いてあるしおりが張り付いている。

確信があつたわけではない、だが俺は無我夢中の内に拳に先のしおりを載せ、ハンマーに押し付けておいたのだ。

その影響かは知らないが、『叩く』に関連する動作をあのハンマーから消し去つたのだ。

ここぞと宇白に向かって走る、本力バーの角でちからいっぱい宇白を殴る、宇白は普通に倒れる。

「体は人間なんだろ？『大罪者』、お前はなこの世界に居ちゃいけないんだよ」

俺は宇白の体をコントロールしている『大罪者^{ソイツ}』に話しかける。

俺は本の字引で『宇白』を選び、コマンドから『動く』を指定し出てきたしおりを宇白のおでこに貼り付ける。

『動いちゃめっ』

宇白は体に力を入れられずに倒れる、どうやら本はちょっと薄すぎ百科事典、そこで調べて出現したしおりは指定したことを封じると

んでもない物だったようだ、本をビー玉に戻す。

「さて、どうしたもんかな」

宇白の隣に座り込む。

「『暴食』リバーズ」

宇白の声でハンマーがフツと消える。

「『傲慢』展開」

宇白の頭の上に日本刀が出現し、トスツ、と地面に落ちながらしおりを破く。

宇白は起き上がりこちらを見下す。

「睡眠時間が短いな、お客さん」

呆れたようにばやく俺をよそに宇白は日本刀を持ち上げる。

俺はビー玉をもう一度変化させる、また本が出れば敵じゃない、だが俺の期待を裏切る天才のこのビー玉は普通より少し大きめのハサミに変わった。

「つたくよ!」

今度は敵の能力はわからない、しかも自分のエモノの力をまた理解しなければならぬ、俺の体も限界に近い訳だが…、こんな所で死んでやる義理はない。

戦い続けた、ココでは時間が経たないのでどのくらい戦ったかはわからない、だが歳をとらないこの世界では無限の戦闘が行える、傷を負わなければ体力の消費も起こらない。

しかし、機械のように疲れが表情に出ない事、そして相手は戦闘慣れして遊んで戦っても俺よりなにもかもが上回る、最後にハサミ対日本刀なら勝敗は弾き出すまでもない。

もう腕の感覚がなくなってきた、永遠とゆうワードがこんなにも苦痛に感じるとは考えもしなかった、相手も負傷しているものの、何もなかったかのようにこちらに歩いてくる。

目を静かに閉じる、俺はどうやって『クリフォート』を追い返したんだっけ？

俺は生き残ったあの日を思い出す。

そうだ、あんどきもこんな風に意識が途切れて。

もう限界だった体もガクツ、と力が入らなくなり、脊髄の部分に糸でもくくりつけられているかのようにだらんと立っている。

そして、再起動するように身を起こす。

体はとても軽い、俺はハサミを強く握る、するとハサミは形状を一度失った後、青龍刀に変わった。

「敵の戦闘続行を」

宇白がそう言い終わる前に相手に向かって駆け出し、一閃をくりだす。

日本刀でなんなく防がれる、その間にさっき振った勢いを増すようにクルリとまわりもう一閃を放つ、あの時、三夜のステップはまだ体は覚えている。

あの時は俺の意識ではなかった、産まれた時からあったかのような人格、だが何も変わったものなどない、俺はこの武器の特性も戦い方も知っているのだから。

一度攻撃する度に数を倍にしていく、まだ速度が上がる、その内に日本刀が腕ごと吹き飛ぶ、だが攻撃は終わらない、相手が同級生で俺に初めて話かけてくれた人間だとわかっている、だが攻撃は終わらない。

攻撃が終わる頃には相手は肉片になっていた。

戻ってくる、宇白の中から俺が貸していた『大罪』が、そう戻ってくる。

ビー玉が不規則に形を変え、オーバーワークに次ぐオーバーワークで俺の脳みそは完全に停止した。

｝ another part ｝

彼の潜在能力はやはり高い、コレなら私の願いも叶うだろう。

さあ次に行きましょう。

白い髪が揺れる。

六夜・純粹惡（前書き）

続きいゝ、主人公の能力・・・よくわからないかな

六夜・純粹悪

（c o g h w e e l）

今日は早く家を出ることにした、宇白のことが心配だったからだ、宇白の家の場所は紫藤さんの調査資料を覗いておいたので知ってる。ピンポン、住所にあったのは一軒家ではなく、学生用に建てられた寮みたいな所だった。

「はい」

中から声がする、良かった、まだ紫藤さん達はここに来ていないようだ。

ガチャ、と扉が開く、まあ中から出てきたのがね、宇白じゃなくてもう良いじゃないか、君もそう思うだろ？ヤロウの家に訪ねたら知ってる女子が寝巻きで出てきたんだぜ？

「すまん、お邪魔したな」

俺は全速力で逃走を計るが部屋の中に引きずり込まれた。

「ごめん、ちよい俺着替えるから待ってて」

本田である、昨日よりも言葉使いが男っぽくなってる。

それよりもキレイな部屋だ、本田がキレイにしたに違いない。

「宇白は？」

昨日から居ない、と洗面台から返答が来る。

帰ってきてないのか、もしかしたら…。

「本田！」

洗面台に直行、そして両手で本田の両肩を掴み壁におしつける。

「今日は家にいろ、そんな言葉使いじゃ外に出ても恥かくしな」

念には念でここに閉じ込めることにした、俺の予感が正しければここに居て損はないからな、だが本田はこっちを向いていない、人の話を聞かないキャラだとは思わなか…。

俺は手を離し5歩ほど後ろに後退する。

「悪い、喋り方に宇白っぽい親近感を」

本田はコクコクと頷いている。

「じゃ、じゃあ家に居てくれな」

場の空気に耐え切れず、俺は部屋から出て行く。

出て行くときに鍵を開かないようにぶっ壊した、中から本田が叫んでいるのが聞こえるが今日はガマンしてもらおう。

学校へと急ぐ、校門は銃弾と何か円形の物でへこんだ校門、そして

地面にクツキリ残る足跡、みるのも悲惨だった。

大体の見当はつく、校門を潜って『ジャングル』の空間に足を踏み入れる。

「鬼山あ！何で来た！」

入るや否や紫藤の一喝が俺にとんでくる。

紫藤が宇白と戦っている、紫藤は宇白が振り回すハンマーをかわし、手に持っているマグナムで頭部を打ち抜く。

その場に倒れこむが、何も無かったかのようにゆっくりと起き上がる宇白、ハンマーを日本刀に換えて見事な抜刀術で紫藤を狙う。

「くそ、こいつ何で武器を換えられる」

え？武器って換えられないの？

紫藤はマグナムを軍用のマシンガンに変更して撃ちまくる。

「いや、紫藤さんも変えてるじゃないですか」

戦闘中であろうと空気を読まずにつっこむ俺。

「誰しも同じ武器の種類なら変更できる、だがコイツは武器の種類を変更する」

つまり紫藤さんは『銃』の力、『銃』の形状なんにでもできる、だけど宇白は力そのものを変更するのか。

「ってじゃあ複数の力があるようなもんじゃないですか!？」

今更かつ、とつつこみながらショットガンをぶっぱなす紫藤さん。

「鬼山君ですか？離れていてください」

紫藤の背後から飛び込むように援護に来たのは葛城だった、その援護はもう援護とは言えなかった、人間業を越えた拳一撃一撃は確実に宇白の骨を砕いている。

「葛城！ハンマーの怪我は？」

「大丈夫です、紫藤さん、援護を」

紫藤の攻撃と共に懷に飛び込む葛城、一撃目で肋骨を粉々にし、二撃目の拳は顎を砕く、そして連撃の最後に渾身の蹴りが入る、普通の人間相手なら十分すぎる殺人だ、だがゾンビにそんな攻撃は通用しない。

渾身の蹴りをだした葛城の右足を掴み返し、切断しようと日本刀を振り下ろす。

「伏せろ！葛城！」

なんかありえないぐらい銃口の長い銃を構えている、三脚を利用しないと衝撃を吸収しきれないその銃を撃つと宇白の体はかなり遠くまで吹き飛びぐったりと倒れた。

「お見事です、紫藤さん」

紫藤に賛美の声をかける葛城の後ろには既に復活した宇白、武器は変更されており、その両方が尖った細い針を葛城さんに投げる。

「葛城！！」

背中に何発か食らった葛城さんが倒れる、俺は宇白と二人の間に入り、その間に紫藤さんが葛城さんに駆け寄る。

「体に力が入りません、あの針には恐らく『憤怒』の能力があります、それに、『7つの大罪』全てを所持している、注意してください」

葛城さんの目が閉じる。

「紫藤さんは葛城さんをお願いします、宇白は俺が食い止めますから」

紫藤さんが葛城さんを担いでくの見送った後、俺は目を閉じる。

あの夜と同じだ、体全体の電源を落とす。

そしてゆっくりと再起動し、ビー玉を握る。

形を変えたエモノは槍、矛先は三又になっていてポセイドンあたりの槍を連想させる。

宇白はダメージを受けすぎたせいか狂ったように笑う、そして針を高く空に上げ、また違う武器を連想する、出てきた武器は斧と槍が合体したハルバートと言う武器を軽量化したような武器だ。

お互い長いエモノを振り回すように戦う、そしていつの間にか動きが全くの対になってることに気付く。

俺は一步後ろに下がり槍を振りかぶる、相手も槍を振りかぶり、何の合図もなしに同時に投げる、お互い投槍でない槍をよくもこう簡単に投げられるものだ、ハルバートの斧の部分が三又に上手く引つかかり鉄同士の爆ぜる音と共に二槍は地面に刺さる

槍に向かって同時に走り出す、お互いの槍を全くの別方向に蹴り肉弾戦に移る。

この時も勿論対である、相手の攻撃するところがわかる、それは俺が攻撃する場所だからだ。

また一步距離をとり、同時にさっき蹴った槍を取りに行く、宇白に三矛、俺の手にはハルバートが握られる。

他人の武器とは思えないぐらいに頭に戦い方が入ってくる。

俺は相手の突きを手のひらにわざと喰らい、三矛をビー玉に戻す、そして間髪入れずにハルバートで攻撃するが宇白が指を鳴らす、とハルバートは宇白の体に当たり砂のように崩れていく。

全くラチが明かない。

だが宇白は倒れる、俺の後方からの強力な攻撃によって。

「全ての『矛盾』は無くなる、俺が無くす」

紫藤さんはマジギレモードである。

「一つ教えといてやる、俺から逃れた『大罪者』は一人もない」

紫藤さんはもう敵を待つてやらない、今までは弾切れを起こしたら弾を連想してリロードをしたが今回はリロードなし、弾切れを起こした武器を換えまた違う『銃』に変換する、まさに弾幕。

宇白は起き上がらない、起き上がれない。

「待てっ」

圧倒的な紫藤の猛攻もその声によって止まる。

本田 桐栄彼女である。

彼女は倒れている宇白を回収し、空間の出口に走っていく。

「紫藤さん！逃げますよ！？」

「いい、あの女は気流と地脈を操る、今銃ぶつ放したらここら気流を巻き込んで暴発・・・まあんな事は関係ない、俺のターゲットはまだここにいる」

紫藤は俺に向かって銃を構える。

「鬼山、お前がホンモンの『大罪者』、だな？」

俺が受け止めたくなかった一言を紫藤の口から放たれた。

「お前が『クリフォト』と戦った事の説明で出てきたのは青龍刀、今使ったのは槍、そしてあいつとの鏡写し、お前は体に二つの力を蓄積させている、『セフィロト』の『使命』、『クリフォト』の『大罪』、先に『使命』の力があつたお前に『大罪』の力が加わって、体に負荷がかかりすぎたため『大罪』の力の半分を宇白に移した」
違うか？、と聞いてくる。

俺は黙って臨戦態勢に入る、俺は、おそらく、そうなんだ、宇白と酷似しすぎる力、だからってみすみす捕まってやるほど頭はおかしい。

体を眠らせ、再起動させて紫藤から目を離さないように逃げる。

銃を構えた紫藤は俺を撃つてこない、本田の気流のせいでまだ無闇に発砲できないのだ、この機会に便乗して走り出す。

出口に向かいながらビー玉を変化させる、出てきたのは白く厚い力バーに覆われた本だった。

意識を再起動させ、『クリフォト』と戦ってる時のあの人格と半分繋がっている状態の俺にはその本の使い方が簡単にわかった。

自分の名前をつぶやき、その本で自分の名前を調べる。

鬼山 龍爾、『断罪者』、能力を全く使ってなかったので能力の詳細はわからない、今は『大罪』との併用により力は半分になっているが、能力自体は上級である。

『大罪』をさする。

大罪、七つの大罪の意、人間に憑依する能力、『大罪者』が狙っている、その力は

暴食：真実を創り出す力 記憶を複製し、敵を混乱、洗脳する

憤怒：限界を創り出す力 そのモノの何らかの限界を創る

色欲：障害を創り出す力 何らかの形で障害を与える、しかし殺傷能力は無い

嫉妬：固有を創り出す力 何かに一つの固有を付け加える

傲慢：結束を創り出す力 何かと何かを繋げる力

怠惰：空間を創り出す力 ある一定の範囲に自分の想像する空間を作り出す

強欲：精神を創り出す力 何かに何らかの精神を与える

、と種類は豊富なものの、一人に一つ的能力しか憑かないのであまり強い力ではない、だがオマケみたいなものでその大罪の意思が乗り移る、この意思が乗り移ると精神をコントロールされ、自分の限界を勝手に出し切り戦う。

つまり俺の力は『使命』と『大罪』の半端モン、紫藤がいつてた通り俺の力が半分宇白に移ってるのだとしたら…。

俺は怠惰の力を解放する、俺の手には先の戦いで使用した槍が握られている。

槍の力を解放すると俺はもう外にいた、コレが俺の力なら…。

俺は開発区に向かった。

「やあ少年…」

廃ビルの屋上近く、お偉いさんの部屋にヤツはいた。

「上手く躍らせてくれるじゃないか、次の曲はなんだよ？」

俺の嫌味に『クリフォト』はケケケ、と笑う。

「そろそろ幕引きだよ、大罪者、いや断罪者だっけ」

自分が大罪を上乗せしたにもかかわらず、クリフォトはとぼけたように聞いてくる。

「ふざけんのもいい加減に」

掴みかかろうとするとクリフォトは俺の後ろを指差す。

「お客さんだよ、接待よろしく」

クリフォトは消える、背後に立っていたのは肉弾戦を主とした戦いをしていた葛城だった。

「私のカレー、おいしかったですか？」

「お世辞なしでね」

葛城は部屋のドアをオモチャのように取り外しそのまま殴ってきた。

俺は避けない、直でくらっても痛くない、ドアが壊れるだけだ。

「構えなさい、大罪者、それともこのままやられてくださるんです

か？」

俺は窓から飛び降りる、かなりの高さがあったが全く苦にならない、もう俺の体はおかしくなってきたている。

上から一直線に蹴りを入れてくる葛城を片手で受け止め、ゆっくりと地面におろす。

ビー玉を探したが見当たらなかった、気付けばもう使ったあとのようだ、限界を創り出す力、いや『使命』の力が働き、能力が逆転しているわけだから限界を『
』力か。

葛城の猛攻は止まらなかった容赦なく連撃が入っていくが俺にはなにも感じられない、ただ何かに触られている感触だけだ。

「なんで、私、聖職者なのに」

何度も俺を殴る。

「頑張ってるのに」

上段に蹴りが入るが仰け反りもしない。

「あの人が見てくれてるのに」

俺を殴る手が止まりその場にうずくまる葛城に問う。

「あなたは『断罪者』、だけど武器による能力の発動が出来ない」

図星をつかれたように俺の顔を見つめる、俺は本で敵を調べつくし

ておいた、必ず生き残れるように。

「『断罪者』によってそれは異端でしかない、だが武器で出せない代わりにあなたはクマをも本気を出さずに一撃で倒せる力を手に入れた、大丈夫、あなたはそれで良い、十分頑張ってる」

能力をビー玉に戻し、ビー玉をまた違う能力に変える。

精神を『
』力が乗り移ったその鈴を鳴らすと葛城はその場に倒れた。

（another part）

私は産まれたときにある『使命』を受けた、様々な『原因』を無くす、それが私の『使命』だ。

だが私は武器を連想することができなかった。

本部に預けられ三年、彼らは私を異端だと言って処刑されることになった、それで良かったのだ、私は神に愛されてなかったのだから。

処刑決行の日、私を今生きている『原因』が現れた。

「その少女、家で預かるう」

本部の中では『使命』の力は絶対、若干12歳で幹部クラスに昇格した少年に私は預けられた。

なんでも彼は世界の『矛盾』を無くすことを『使命』として授かり、仲間であるはずの私が処刑される『矛盾』が許せなかったそうだ。

彼の家では家事を全般的に任された、もともと奴隷のような扱いを本部で受けていた私には楽な仕事だった、ある日。

「何事だ？」

「ご主人が連れてきたあの使用人がまた皿を割ったり、箸を折ったりしたんです」

私の体はついにおかしくなってしまった、あの時処刑されなかったから神様がお怒りになられたんだ。

部屋に閉じこもった。

『原因』を無くす者がもろもの『原因』を作っていく、こんな『矛盾』をご主人様が許してくださるわけが無い。

もう死んでしまおう。

「笹、手伝ってくれ、遠出する」

ご主人様は相変わらず私を見捨てずにいる、自殺しようと思う前に私を連れて出かける。

ご主人様は私の前だと言葉使いや態度が子供に戻る、それが少し嬉しかった。

「笹、下がれ、『大罪者』だ」

たまたま私からお出かけにお誘いした日に『大罪者』に遭遇した、

ご主人様の力は相手に『矛盾』がなければタダの銃でしかない、みるみる傷ついていくご主人様を助けようと敵に飛び掛った。

「とくやった筈、お前の手柄だ」

敵は一撃で倒れ、『大罪』を発動した『原因』として男を本部に持ち帰った。

私の『使命』は生きていた、武器の形にならず私の体の中で膝を抱えていた、その力を抑えきれなくなって私の体は人間の能力を遥かに超えてしまったんだそうだ。

「お前さ、『矛盾』してるよな、武器になるべき力が体に宿ってるなんて」

ご主人様は私が要らなくなってしまった、そう思った。

「お前の『矛盾』もかき消すからな、ついて来い」

『セフィロト』を屈服させて『断罪者』を消す、私達はこの力から開放される道を約束した。

〈main part〉

鈴をビー玉を変換、戻したビー玉を体に埋めるように変化させ限界を『力』、そして遠くで迎えもこないで俺の能力を観察しているヤロウに向かって葛城を投げる。

その足で開発区の南部に向かって歩く、あいつはまだ人だから、ここにいないはずだ。

「主、人　をか　くにん、かいしゅ」

もつまるで壊れた機械だ、俺はビー玉を大きな布に換える、障害を

『　力に。』

「ああ、待たせたな宇白、今更でよかつたらそのバイキン返してくれ」

人一人を包み込める布を取り出し宇白にかぶせる、そして数秒待ってから布を剥ぐ。

「半身を再確認、『大罪』の回収を行います」

傷一つ無い体にもどってくれた、俺はその布を青龍刀に換え、宇白と『大罪』の繋がりを切り落とそうとする。

ドスッ、背後から肉が裂ける音がする。

「ハハ、ハハハ！」

宇白は笑っている、その感情はこもった笑いはもう大罪者のコントロールを受けていなかった、そうか、お前は純粹悪だったか。

そのまま倒れる、俺を刺した本田が泣いている、おそらく『結束』を創り出す能力で無理やり精神をつなげられたのだらう。

後、ちよいでハッピーエンドだったんだけどなあ。

（another part）

この軸の分岐はこれ以上にはない…か。

また始めからやり直さなければならぬ。

この時間の鬼山君はよく頑張ったほうだ。

さよなら、次はもっと上手くやるから。

金色の目が光る

二夜・紅咲 三夜・死（前書き）

アレ？一日目は買い物に行っただけだったか？
もう…ダメ

二夜・紅咲 三夜・死

}\coghwel\

「俺がそんな仰天話を信じると思つか？」

そいつは笑って当然のように答えた。

「信じる、貴方は信じる、だって他の時間軸のあなたは信じたもの」
こいつの奇天烈話は何故か本当のような気がした…。

今日の朝はいつもより早く家を出て、変な男に会ってビー玉をもらって、この林の空間に迷い込んだ。

そこで片腕の男と遭遇、俺はランダムに七変化する武器を上手く使いこなし敵を倒した。

そしたら林の奥からこの女が出てきた、同じ学校の生徒でサデイストちっくな外国人みたいなやつだ、名前を 填島 梢と言っらしい。
彼女から聞いた、能力のこと、その中に区分される『断罪者』『大罪者』のことそしてそれらを破壊する方法。

「信用するための確証をくれ」

彼女は笑う。

「信用してくれれば後5日は確実に生かしてあげる」

俺は彼女の話をお聴くことにした。

「まずあなたの能力の事ね、今の状態じゃまず生き残れない、あなたに備わっている力は二つ『使命』『大罪』どちらかを捨ててもらう、今晚にその説明するわ」

墳島の説明はその状況ギリギリにならないとわからない。

「それでああなたの違う時間軸の話、あなたは『大罪』の力を半分にして『使命』の力で補う方法を使っている、『大罪』のほうの説明をしましょうか

『暴食』、真実を創り出す能力
『憤怒』、限界を創り出す能力
『色欲』、障害を創り出す能力
『嫉妬』、固有を創り出す能力
『傲慢』、結束を創り出す能力
『怠惰』、空間を創り出す能力
『強欲』、精神を創り出す能力

こんなにあるけど、さっきの戦闘は全ての力を使ってくれたから良かったはず」

7つとも確かめ使用したのでなんとなくどれがどれだかわかる、だがなにかがおかしい。

「そして違う時間軸のあなたは『使命』の力で創り出す能力を『消し去る』力に無理やり変えて戦闘を行った、例えば『憤怒』限界を創り出す能力を『使命』で限界を『消し去る』力にして体に埋め込み、名前どおり限界を失って人間を超越した動きができるわけ」

なるほど、違和感はそれか、俺の力は今打ち消す力に完璧に変わってるとわけた。

「つまりそんな中途半端じゃ勝てないから『使命』を捨てて『大罪』のみにするんだな」

填島は首を横に振る。

「『使命』の能力は『大罪』の能力の改変が本当の力じゃないの、その本当の能力がどのくらいの物が確認するから、今日の夜に家で待ってて」

試しに一つやらされた、『大罪』を半分、『使命』を半分、『怠惰』の発動、空間を消し去る能力を発動、三又の槍を地面に突き刺す。

『ジャングル』の空間を消し去り『林』に戻る、道の途中にいきなりワープしてきた先生が驚いて心配してくる、違う時間軸の俺も驚かれたのだろうか…。

そして夜になった、填島は夕方から家に居座っていたのでスグ行動に移る。

公園のベンチに座って20分。

「なあ」

耐え切れなり話しかける。

「もう少しよ、どの時間軸も同じなのね、ガマン強さがなさすぎ」

あの時ももう少しガマンできたんじゃないの？なんてぼやいている。その会話が終わるとやけに周りが明るい、よく見ると花壇の花などが紅色に染まっている。

「この町の花は全て地脈によって紅く染まる、その特殊な地脈によって新人生は能力に目覚める、そしてクリフォトとセフィロトが降臨した合図よ」

「なるほど、この現象から紅咲町」

そう、どこかに向けてずんずんと進んでいく填島を追いかける。

「ドコ行くんだ？」

「そのお荷物ビー玉を置きに行くの」

このマンションと案内された部屋で寝ている男の前まで侵入してきた。

「ビー玉貸して」

ほいっと渡すと少年の額の中にビー玉を埋め込む填島。

「コイツ、中身純粹悪だから、あなた以上に『大罪者』に適合してるの」

そういいながらゆっくりとビー玉を埋め込んでいく。

「終わったわ、かえりましょう、今日泊まってくけど襲わないでね」

すごい剣幕で睨んでくる墳島。

「信用無いな」

「文句なら違う時間軸のあなたに言うのね、まあ、襲ってきて真っ黒コゲになってるから話は出来ないと思うけど」

今日はおとなしくしていよう。

次の日、今日は学校に行くわよ、と当たり前のことを指示してさっさと出て行く墳島。

そして昨日額にビー玉を埋め込んだ男と同じタイミングで門をまたぎ、『ジャングル』での戦闘を見守る。

「ここで彼がやられると適合者としてあなたに『大罪』が戻ってきてしまう、変わりに戦闘を行う、いい？」

墳島の言ってた通り、宇白ってやつはオーバーワーク、やけに男っぽい言葉使いの本田ってやつは混乱してしまい戦闘にならず俺達が戦うことになった。

「助けてくれてありがとな」

本田は自分の情けなさに照れながら礼を言ってくる。

ちなみに口調が男っぽくなっているのは別時軸でも起きており、俺が宇白ってやつに『大罪』を送ったことにより追い出された宇白の人格が本田に乗り移るため、だそうだ。

敵を目の前をなぎ払いながら填島が自信たっぷりと言う。

「自分の中の武器を呼び出して、『大罪』がないから簡単に自分の力が出てくるはず」

ビー玉がないおかげか、自分の中の『使命』を呼び出すのに時間はいらなかった。

出てきたのはボロボロになった包帯だった、俺はその使い方がわかるかのように両手に巻きつける。

そして襲い掛かってきた男の攻撃を楽に避けて顔面を殴りつける、すると男の姿は透き通るように消えていった。

他の人間を良く見る、見えてはいない、だが俺の脳がそう意識しているのだろう、人間の『生』『能力』などをつかさどる部分が見える。

その中で『能力』の部分を意識して殴るとそれが消え、その人間も消えていった。

「能力の部分を消したことによってさっきの軍人がココにいる理由を消したわけか、能力なんてなければこんな所に侵入する意味なんてないし、さしずめ『理』を消し去る力かしら？」

違う時間軸で俺の力を知っていたハズ填島が笑う。

森を越え、宇白と本田を先生に預けた後、俺達は開発区に向かった。

「ここであいつに？」

「ええ、戦闘は私向きじゃないから、あなたに任せるから」

廃ビルの中に隠れるように入っていく填島を見送った後、俺は開発区の奥に進んだ。

人影が一つ、背もたれがなくなったベンチに座っている。

「ボクで残念かな？ 鬼山君」

いたのはあの男じゃなかった、きちんとした身なり、新しいジーパン、きれいに整った金髪、紅く光った目、クリフォートと正反対の格好をしているコイツが誰かはすぐにわかった。

「セフィロト」

男は正解だ、と笑う。

「あの女にだまされたね、この時間軸はアイツじゃなくて俺が降臨してるんだよ」

俺は構える。

「おっと、やる気かい？ やめなよ、その『使命』は誰が授けたのか知ってるだろ？」

一発目で消し去るために全力で殴るが相手に当たらない、体を通り抜けてしまった。

男は腰のホルダーから何かを出す。

「『人間』としてのコイツは雑魚だったろう？でも『物』であるコイツは今の君にとってどれだけ脅威なのかな？」

男がそれを使うと俺の意識は電気機器のコンセントを抜くように切れた。

｝ another part ｝

壁を殴る。

「こんな、こんな時間軸、卑怯よ」

死んだ彼に謝る。

ここにいるワケにはいかない。

私は次の時間軸に移動する

二夜・紅咲 三夜・死（後書き）

こんなものを呼んでいただいて恐縮です
そろそろ終盤、もう終わりますね

一夜・もう一度 二夜・矛盾（前書き）

続きです

一夜・もう一度 二夜・矛盾

}\ cogn wheel }

「鬼山、龍爾」

その少女は俺が夕飯のラーメンを食ってる最中に現れた、体は衰弱しきり、意識ももうろうとしている。

とにかく俺の名前を知っていた以上見過ごせずに家で休ませた、少女の名前などは生徒手帳でわかった、填島 梢、彼女の名前だ。

填島はしきりに謝ってくる、謝ることしかしてくれない、落ち着くまで待とう。

「あなたをまた殺してしまうかもしれない」

彼女は俺を殺す男の名前を教えてくれた『セフィロト』とゆう『人』と『物』の姿を相方と交互に勤るやつ、そしてその相方の『クリフォト』には明日の朝には出会い、俺に不思議な能力を預けるそうだ。

「予言？」

「形としては間違っていない、私は時間軸を歩行できる人間、他の時軸のあなたを観察している」

時間軸歩行？

「パラレルワールドを行ったりきたりしてるってこと？」

彼女は頷く、まあここは信じるそぶりを見せよう。

「俺は死ぬの？」

また頷く。

「そっか…どうすればいいの？」

彼女は顔をあげて俺の顔を不思議そうに見ている。

「そうだった、彼方には死の概念が捕らえきれないんだった」

彼女は仕方ないやつ、と笑った。

そうだ、俺に恐怖心はない、俺が死ぬなんて思ってない、もし本当に死ぬなら飛び切りの冗談だと笑ってやる。

彼女は俺の能力を教えてくれた、俺は能力の連想を填島に言われたように行い、『使命』の力を取り戻す、そして明日に備えて今日は寝ることにした。

次の日、俺は填島の言っていた男に会った、今の時刻は夜明け前、午前3時。

「今回は早いんだな」

男は髪の毛を整え、素顔をさらしている。

「ああ、そろそろ疲れたんでね、くれよビー玉」

男はビー玉をこっちに投げてくる。

「成功を祈ってるよ」

次の場所に移動しようとする俺に男はケケケ、と笑いかける。

「嘘付け、偽善者」

知り合いのように別れた。

俺は時計塔に向かうとそいつは俺を待っていた、連れに見つからないように俺を待っていた。

「鬼山龍爾、『大罪者』」

「知ってたのか？」

まさかこいつも時間歩行者ってワケじゃないよな。

「俺の『使命』が『原因』をなくすことだとしてよう、誰かが殺されてしまいました、その場合その人間が死んだ『原因』を俺は見る権利を得ることが出来る、そして俺の『使命』は『矛盾』を無くすこと、時間歩行しているあの女の『矛盾』のおかげで俺はお前の存在を見る権利を得た、あの女がなぜ時間歩行ができるのかも、な」

タバコに火をつけて一服している。

俺はビー玉を強く握る、力は半分半分で使うものじゃない、『使命』を完全にシャットアウトし『大罪』を起動する。

男も銃を取り出し、俺に向けてくる。

「時間歩行者でもないのに他の時軸を知っている『矛盾』、『大罪者』なのに『断罪者』である『矛盾』、もう人間でいられるはずがないのに『人』である『矛盾』こいつは高くつくぞ！」

俺は意識をカットし、『大罪』に繋げる。

「敵性反応を確認、撃破します」

俺の中の『大罪』は機能し、敵を潰そうと走り寄るが敵はそれを許さない、多くの『矛盾』を持っている俺にヤツの弾丸は一撃一撃が命を奪う攻撃だった。

銃を次々に変えていくヤツに俺も次々と武器を変えていく、だが俺には全てを防ぎきれない、障害を創り出しても、固有を創りだしても、時空を創りだしても、限界を創りだしても、真実を創りだしても、精神を創りだしても、あいつは限りなく銃を打ち続ける。

俺は『大罪』をカットする、そして『使命』を起動する。

包帯を手に巻きつけ、放たれる弾丸から『触れる』概念を消していく。

「器用じゃねえか！」

近づく俺から一步も引かないこの男、まだこの時間の俺はこの男と名前を交わしてもしない、その人間と戦っている。

俺はもう彼の一步前までできていた、俺は力を半分に分け、精神を消し去る鈴を取り出して彼を眠らせ、その場に寝かせる。

さて…こいつの言うことが本当なら俺には必要不可欠な能力だ、填島の『矛盾』を覗くためには。

『使命』を呼び出し、この男に集中する。

消し去るのでは意味が無い、俺はうつろに見えている部分をもっと簡単なものに連想していく。

男の体は無数の歯車で出来ている、そう連想すると男を動かすものが歯車に変わって行く。

一番動いているこいつは心臓かな？なんて思いながらこの男の『使命』を探す、この世界の全ての『矛盾』を無くす力を探す。

それはこの男の中心に埋まっていた、男の生きがいのように、全ての歯車をまわす中心のように。

俺はその核の歯車を取り出す、そして自分の体の隙間に埋め込む、男はまだ生きている。

俺であり俺じゃない人間の記憶が流れ込んでくる、これが違う時軸の自分とリンクするって事が、一日目の夜の俺は全員寝ている、のんきなもんだ。

俺は家に帰る、玄関で泣いている填島が見えた。

「まだ四月だ、冷えるぞ」

墳島は俺に気付いて泣きついてきた、置いていかないと欲しいと呟く、少し申し訳ないことをした。

『矛盾』を無くす力で他の時軸を見るがこんなにも弱い墳島は見当たらない、時軸を見ると俺は二日目で墳島に会い、三日目の夜にセフィロトに殺されるパターンが3564回あった。

それまでは少しずつ核心に迫っていた話もそこで絶対に止まってしまっている、彼女は3564回、俺が死ぬ所を見ていたんだ、あんなにも衰弱しながら。

んなクリアできないゲームを拗ねて深夜までやってる子供じゃないんだからさ。

笑いながらそこまでして俺に近寄る『矛盾』を彼女から見る。

＼another part＼

世界が何者かによって一度リセットされた日、私にこの呪いはふりかかった。

あらゆる時代の時軸間を歩行し、もしかた文明が間違った方向に向いたとき、その何者かを呼んで世界のリセットを行わせる、それが私の呪い。

歳はその時点で止められた、それから何年生きたのだろうか、いや時間を歩行している私に生きた時間なんてものはないだろう。

時軸を探検している時、ある面白い時軸を発見した、産まれたとき

に『使命』の力を授かり、ある町に入学し、その日に『7つの大罪』全員が殺され、次の日に『7つの大罪』を全て背負った少年だ。

一回目の時軸は何もしなかった、完璧な部外者を装って彼を観察した、彼はその運命に耐えられずに死んだ。

次の時軸を見た、彼はまた『使命』と『大罪』を背負っていた、そして死んだ。

そして気付いた、人が産まれた時から無数に分かれるはずの時軸、だが彼は『大罪』を渡されるまでは人生を一本道で過ごしている、つまり必ず『使命』と『大罪』を背負わされ、そこから人生の分岐が始まり7日までに必ず死ぬ。

私は彼の人生をいじってみたくなった、そのために能力者でもないこの体をこの時間軸を歩ける力と老けない体を利用し、長い年月を費やし、能力者にした。

それから何度か接触し、私と接触するほど彼は人生は変化を見せていく、ある日彼は神が創造した『大罪』を産み出す男を撤退させる時軸を見た。

私は楽しくて仕方なかった、どの時軸を見てもこんなにも大きな力に抵抗できる人間は存在しなかったから。

それから私は教えて良い範囲を教えるだけ教え、大きく接触を試みることにした、彼の能力は生みの親を倒す力があると核心する。

コレは私のわがままだった、この呪いを受けたことに対しての神への反抗。

だが彼の物語は進まなくなってしまった、私の企みが『使命』を授けるものに知られ、三日目の夕方に必ず彼は殺されるようになってしまふ、何度も見ている内に彼を私のわがままで殺してしまっている罪悪感にとらわれた。

そして謝罪しに行くとは彼はこの遊びに付き合ってくれると笑ってくれた、私はこの時軸から抜けたくない、この時軸に居たい、そう思ってしまった。

でも彼は死んでしまふ、違う方法を試しても彼は死んでしまふ、もう私の精神が持たなくなつた、私はまた彼に泣きついた、今回の彼は俺は死なないと言ってくれた、今回を最後にしようと思つた、こんなことをしなくても違ふ時軸では彼の友達でいられる、だから普通の人として接しようと思つた。

朝の5時ぐらい、いつもの彼が起きる時間だ、だけど彼はいなくなつていた。

錯乱してしまい玄関で立ち尽くしていると彼は帰ってきた。

この姿が愛しく思つたのはいつだつたらうか、始めは彼の死体を見ても何も感じなかつた私は今は彼が居ないと気持ちが悪く落ちて着かなくなっている。

彼が私の体を気遣ってくれた時、『普通の人間だったら』と強く願つた。

｛ main part ｝

「今度会うときは少し女の子らしくなってるよ」

俺は『使命』の力で彼女の体を見る、体は空っぽだ、呪いの歯車の
みが動いている。

彼女は俺がしようとしていることに気付き、俺を振り払おうとする
が今の俺には触れない。

「ダメ、それはダメ！」

拒否の言葉を聞き終わる前に俺は彼女から呪いを取り出す、呪いを
失った彼女の中に新品の歯車が積まれていき、動き始める。

彼女は何か大きなものを失ったように放心状態になり、すぐに意識
を取り戻す。

「嫌だ、いなくならないで…」

俺は呪いの歯車を自分の中に埋め込み、この時軸を離れることにし
た。

填島が止めようとするが、俺の体を通り抜けるだけで足止めになら
ない。

俺はこの遊びの詰みに向かう

一夜・幻影 二夜・猫（前書き）

続き…です

一夜・幻影 二夜・猫

）cogwheel）

一日目、夜。

この時軸では今晚が紅咲の日だった、一面の真っ紅な血のような花ばかりだ。

「君も懲りないねえ」

学校の『ジャングル』の空間の中、俺はセフィロトに会った、他の時軸でも見たことがある背もたれの部分が壊されたベンチに座り俺を待っていた。この時間軸の彼の髪の毛は長く、月の光を反射し金色に光っている、目は花たちのように紅く、こちらを見ている。

「実はね、俺と戦うのってコレが初めてじゃないんだよ？」

「いいんじゃない？俺は初めてなんだしさ」

そりゃそうだ、とセフィロトはポケットから禍々しい銃を取り出す。

「クリフオートか」

その銃からはビー玉を渡してきたあの男の力が見えた。

「その通り、『大罪』を捨てて、『使命』のみになった君には猛毒だよ」

セフィロトは引き金を引く、確実に俺を殺す事を命じられた弾丸が眉間に放たれる。

セフィロトも飽きてしまったんだろう、3000回越えの戦いを続けてきたんだ、普通の人間と違い、こいつらは他の時軸との記憶の共有、いや、全くの同位体なのだろう。

だがこれ以上やられてやるつもりは無い、あの面にこれ以上無いくらいの一撃を放ってそれで終わりだ。

跳んで来る銃弾を手にとっていたビー玉で弾く。

今回も終わったとばかり思っていたセフィロトの顔に驚きが見える。

「ビックリした？だよな、この時軸ではクリフォトと接触もしてない、このビー玉を持つてるはずがない」

俺はビー玉をハルバートの槍に換え、空間を創り出す力でジャンゲルの空間の中にもう一つ、俺の動きやすい空間を創り出す。

「さて始めようか」

俺達は舞う、舞うように戦う、『人』である互いに互いの武器は自分の死の象徴。

武器は銃、それに比べ俺は7種類を基礎とした創り出す力、打ち消す力で14種類、そして俺の『使命』にあいつの『使命』しめて16種類の力で立ち向かう。

あいつの銃、『クリフォト』の力はおそらく『全てを創り出すきつ

かけ』だ、それを俺は7種類の消し去る力で消し続ける。

物体を作られたらその『固有』を消し、幻覚を作るのなら『障害』として取り除く。

力を相殺し合い戦い続ける。

「糞、糞！糞おおお」

セフィロトの銃弾をかわし、銃の効果で発生する何かを消す。

「こんな敵と戦うのは初めてだろう？自分が死ぬなんて思いもしなかったらう？」

隙を見逃さず鉄球を取り出し、敵に投げる。

「痛い、痛い、痛い、痛い」

銃を構えながら鉄球が直撃した箇所をおさえる。

「攻撃してこないのか？」

俺はハンマーを日本刀に換えてセフィロトの足を切り落とす。

だがクリフトを使い『全て創り出すきっかけ』の力を使い、切られた足を再生する。

「消耗戦だな、まあ消耗すんのはアンタだけだけだな」

セフィロトに向かって笑う。

「ほざけっ」

クリフォートの銃弾が俺の体に当たる。

勝った、とセフィロトの顔に余裕が表れる。

「絶対に揺るがない『正義』、発動条件は己で決められる」

俺は自分の『使命』の名前を唱える。

「通常能力は『理』を消し去る力、補助で自分の力にすることが出来る、そしてこの『使命』の真髄は、『制限』を無くすこと」

他の時間軸の一人は気付いていた、どうしたらこいつに勝てるのか。

銃弾を止めたのは俺の『使命』だ、弾丸に詰まったクリフォートの能力を奪い、その上弾丸である『形状』をつかさどる部分を抜き出し、自分の形を失った弾丸を捨てる。

俺は武器をビー玉に戻し、その理を消し去る、こいつは元は一つだったんだからな。

神が7つに分け、気まぐれに一つに戻ってきたソレは『本当』に戻っていく。

『使命』『大罪』の全ての武器を同時に連想する、オーバーワークのせいか頭が限界にきているのがわかる、俺は『正義』の力でオーバーワークの制限を打ち消す

「お前はこの力を甘んじてみていた、自分が与えたこの能力が自分に帰って来るなんて事は思いもせずに、俺が『大罪』か『正義』の力に飲まれる運命まで創らせて」

様々な『矛盾』に反応して手に持っていたリボルバーが輝き始める、いや、これはあの男の想いかもしれない、セフィロトに『矛盾』なんてありはしない、矛盾がなければタダの銃、だが今回はそれでいい。

「さようなら創造主」

14種の武器をビー玉に封じ込め、ビー玉の形を消し去り、先に取り出した銃弾の『形状』の歯車をビー玉に埋め込みビー玉の形状を変え、セフィロトに向かい、放つ。

「大罪を産み出すもの、断罪を作り出すもの、俺達を殺して世界がちゃんと機能すると思うなよ」

セフィロトは俺の前に屈し、膝をついている。

体の中では創り出す力と消し去る力が互いを消しあい、動ける状況ではないのだろう。

「その役目は俺がもらって行つてやる」

俺はセフィロトとクリフォトからその部分を抜き取り、自分に埋め込む。

クリフォトの笑い声が聞こえた気がした。

セフィロトはそこに力尽き、クリフォトも形状を留めきれなくなり消えていった。

空間を二つ破り、外に出る、まだあたりは真っ紅な花で覆われている、とてもキレイだ。

体の用量がいっぱいいっぱいになってる、もう目を開けてられない。

静かに目を閉じる…。

起きたら朝になっていた、場所は知らない家だ。

「起きたか？」

やけに美人が俺の看病をしていた。

「填島…」

「知ってたの？私のこと」

私って有名なんだな、と妙に誇らしげだ。

そうか、この時軸には呪いを受けた填島は居ないはずだ。

「いや、看病ありがと、俺行かなきゃ」

立ち上がる俺を見て填島は学校に行く準備をする。

「じゃあ行こうか」

いや俺が行くのは学校じゃなくてね。

説明しようとする。と填島は俺の手を引つ張って学校にずんずん進んでいく。

「あんた拾った時にさ、なんか見たことあるような気がしてさ、よく見たら家の猫にそっくりだったんだ」

唐突に話し始める。

「その猫どっかに行っちゃってさ・・・今ちよい寂しいからあんたがその代わり、いいでしょ？」

填島は普通の女の子だった、コレが本当の姿なんだ、呪いもしらない姿。

填島と一緒に登校しているととても楽しかった、ジャングルの空間に入って敵が襲い掛かってきても填島の火力で吹き飛ばしたり、学校側の説明を全く聞かなかったり。

「鬼山！楽しいな」

「ああ、楽しい」

声を楽しそうじゃないと怒られる、理不尽で考えなし、前の彼女とは大違いだ。

だが俺はこの時軸にとどまれない、それが呪いだから。

帰り道の途中、俺はクリフォットの力を使う、『全てを作り出すきっかけ』、俺は彼女の思いの中にある猫を創り出す。

「墳島」

ほいつと猫を墳島に渡す。

「この猫…どうし」

俺のこの時軸の滞在は終わった、最後まで聞かせてくれてもいいものを。

俺の心に『使命』、いや『大罪』が浮き上がる。

クリフォット、セフィロト、時軸歩行者との融合体とし。

『人』もいない、『物』も無い、存在しない『世界』見つけ出す、コレが俺の呪いになった。

もう戻れない、俺は『存在』しない世界を見つげに放浪する。

（another part）

鬼山は消えてしまった、探しても誰も知らない、存在しない。

私は猫を撫でる。

「お前が鬼山だったのか？」

猫はぐっすり寝ている。

アイツが寝たらこんな顔してんだろっな。

私もそろそろ寝よう

二夜・紅咲の月（前書き）

続きます。

二夜・紅咲の月

Cogwheel

「圭！しっかり！！」

家主が戦闘を行って一日が経つ、今日は町中が紅く輝く夜だ。

「笹、俺は消えるぞ」

戦闘によって消耗した体でなんとか言葉を繋げていく。

「鬼山 龍爾との戦闘で『使命』を抜き取られた、上等な呪いだ、俺が『使命』を受け取ってなかった、そんな事実を作り出すくらい」

『使命』を持ち合わせない家主はここにはいけない存在だった。

「そんな冗談はやめて！」

長年付き添った彼女の目の前で消えていく男、彼女の中で彼の存在が消えていく。

「こんなの・・・こんなのおかしい」

彼女は彼が居なければ処刑されていた身だ、彼が『使命』を受け取っていないならあの日に助けてくれる人はいない、それに気付いて彼女は笑う。

「圭、私も消えてあげるね、だからいつか『矛盾』、なくして」

ああ、と頷く家主、二人の存在は消えていった、彼女達が住もうとしなければ取り壊されていたこの古い時計塔も開発区から消えていく。

開発区にはこいつも居た、髪の毛をきちんと切りそろえている、『大罪』を産み出す者、その手には武器としてこの時間軸に居た『クリフォト』

「やつちまつたな…、少年」

別時間軸の自分達から能力が消えていくのがわかる。

「俺達は全時空の『セフィロト』と『クリフォト』だ、パンピーみたいに時間軸ごとバラバラの存在じゃない」

全てが繋がっているためか、能力が解け、人間に戻っていくセフィロト。

そして産み出し、授ける力のない彼らがここにいる意味は無い。

「お前があんなガキにちょっかい出すから」

「そゆお前こそ生まれる前から目えつけてたじゃん」

背もたれのないベンチに二人肩を並べて座り込み、暖を取ってあるドラム缶にあたる、そして二人同時に笑い出し消えていく。

クリフォト愛用の焚き火用ドラム缶、そして鬼山を待ち伏せするためにどっかから引っ張ってきたベンチも消えていく。

今夜は花が紅く染まることは無い、二つの樹はここには降臨しない、地脈も反応しない。

あらゆる事が発生しない世界、樹が降臨しなければここに学校は出来ない、そこに攻め込んでくる人間もない、ここを開拓する人間も……いない。

だがその原因に巻き込まれずに、ひっそりと泣く人間がいる、元からそこには居ない存在、なんにも影響しない存在。

彼女は呪いから解き放たれた、だが彼女を知る人間もない、町が拓かれないその森の中で佇んでいる。

彼は行ってしまった、私をおいて。

もう何も無い、誰もいない、じゃあ私がここに居る理由もないじゃないか、彼がいないんだから。

だから私も消して、この世界から、消してくれてもいいじゃないか。

彼女は何も考えずに歩き続けた、森を越えた先で一つ、小さく拓けた土地があった、ジャングルにあったあの場所に似ている、彼が片腕の軍人と戦った場所だ。

彼を不意に思い出した、考えないようにしていたのに……。

つらくなり、あの時のように杖を振るおうとする、こんな場所、焼け野原になればいい。

すると。

その土地に咲いていた花が紅く染まり始めた。

「なんで？」

彼女はおびえた、樹が生きていたとしたら私は間違いなく殺される。

「今夜も冷えるな」

花畑の中心に突っ立っている男がいる、気配はまるで世界樹だ。

「焼かないでくれな、俺ここ好きだからよ」

何度も目をこするが、涙のせいか彼を上手く見れない。

「ちょい時間旅行しすぎた、疲れたから朝になったら起こしてくれ」

彼はその場に寝た。

「ホント、辛抱強さないんだから」

彼はそのまま深く眠った。

私は彼の隣で月を見ることにした。

花が紅いせいかな？世界がとっても綺麗だ

二夜・紅咲の月（後書き）

…え？終わりですか？

この誤字脱字、矛盾の塊の作品が？！

最後まで呼んでくださりありがとうございました。

誤字脱字はだんだんと直していけたらなあ、なんて思ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4667c/>

coghwheel

2010年11月6日13時43分発行